新たな外史を創る者達

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新たな外史を創る者達

【Ｎコード】
Ｎ５２７９Ｖ

【作者名】
Ｓ

【あらすじ】
外史とは望まれて出来る物。
だが、その外史の終わり方はその外史の登場人物が決めること。
また新しい外史が生まれ『北郷一刀』は
その外史の物語を主人公として進める。
『北郷一刀』はどのような終わり方を選ぶのか。
外史の新しい始まりが今始まる。

とりあえず投稿しました。

『三人の天の御遣い』が打ち切りになってもならなくても
これは続けます。
コメントの制限を解除しました。

一話　始まり（前書き）

あらすじで書いた通り『三人の天の御遣い』が
打ち切りになってもならなくてもこれは投稿し続けます。
今回は名前が出ていませんが分かりますよね？
分からなかったならコメントどうぞ。
では、始まり～

一話　始まり

夜の空に浮かぶ月。
周りには俺以外に生きている奴はいない……
居るのは……いや『ある』のは人だった『物』だけ……
俺が『物』にした……
毎日毎日俺の周りではいつもこんな光景が広がっている。
俺が人を殺さない日は無い……
まるで牢獄だ……

「俺はいつになったらこの牢獄から解放されるんだ……」

解放される訳が無い……
そんなことは分かっていた。
でも、そう呟かずにはいられなかった……
そんなことを考えていると周りの時が止まったように
周りが静かになる。

「これは……」

俺は腰にある刀に手をかけて警戒する。
もし、敵が来るならば俺はそいつを殺す。
でも、俺は分かっていた。
これから起こることは俺に害をなすことじゃないって……
そして、『そいつ』は俺の前に現れた。

「どふふぅぅ。
なら、私がその牢獄から出してあげましょうか？」

「……」

「あら？反応無し？」

反応出来る訳無いだろう。
反応出来るとしたら『化け物だ！』位しか言えないだろ。
俺は初対面の奴に『化け物だ！』って言える程ひどい奴じゃない。

「何でも良いだろうが。
お前がこの牢獄から俺を解放出来るならやってみろ」

「……分かったわ♪
あなたが行く先は『三国志』の
ちょっと変わった世界よん♪」

「……何でも良い」

行く先が牢獄で無ければ……

「行くわよ～♪」

俺は光に包まれ意識を手放した。
牢獄から解放される喜びを感じながら……

骸を作った者が消えて

「まさか……そんな訳無いわよねん♪
頑張ってねん♪

ご主人様♪」

一話　始まり（後書き）

どうでしたでしょうか？
予告編でタイトルを募集しましたが
何もコメントが無かったので勝手に決めました。
これからよろしくお願いします。
では、また次回。

二話　龍帝刀

「はぁ……」

あの筋肉だるまにこの世界に飛ばされて
牢獄からの解放に近づいたんだろうが……

「見事なまでに荒野だな……」

一応離れた所に村は見えるが
それ以外は荒野だ……

「……とりあえずあそこに行くか」

ここに居てもしょうがないしな。
そう思って歩き出すと俺の頭の上を
巨大な影が通り過ぎる。

「ん？」

影は三つ。
一つはあの邑に向かい
二つはそれを追いかけている。

「あれは……龍か？」

その影は龍としか言えない物だった。
そして、その影が邑に着いた瞬間。

ドゴォォォォォォッン！

そんな轟音が邑から離れているにも関わらず聞こえてきた。

「っ！？」

俺はその轟音を聞いてその邑に向かって走る。

邑

邑に着いた俺が見たのはまさに地獄絵図。
俺が居た世界と勝るとも劣らない光景。

「何でこんなことに……」

『ギャァァァァァァッ！』

ドゴォォォォォォッ！

「何だ！？」

音がした方を向くと龍達が戦っていた。
黒い龍と白い龍が緑の龍と戦っていた。

『縁！何故人を嫌うの！』

『人は悪い者ではありません！』

『白！黒！何故分からん！人間など滅ぼすべきなのだ！』
察するにあの縁と呼ばれた龍がこの邑を襲い
白と黒と呼ばれた龍がそれを止めている光景だ。
俺はその考えにいたった瞬間刀を抜いて走っていた。
走っているとどこからか声が聞こえる。

『人間よそのままでは勝てない』

「誰だ！？」

『我は龍帝。
龍を従える者。
汝に龍帝の地位を与える。
強くなりたいと念じろ……
守りたいと念じろ……
その刀の名は『龍帝刀』
その念に龍帝刀も答えるであろう……』

そう言った瞬間声は聞こえなくなった。

「俺が守りたい者……」

次々と浮かんでくる。
皆……
様々な世界で俺を支えてくれた……
時には敵になったこともあったけど
俺のことを支えてくれた……
この世界に来たのは皆を守る為だ……

「俺の念に答えろ！
龍帝刀！」
俺がそう叫ぶと龍帝刀が光った。
「答えてくれたか……
行くぞ。
守る為に……」
俺は緑の龍を見上げて緑の龍に向かって跳んだ。
そして、その高さになって俺は龍帝刀を振り上げた。
『む！？』
「くらえ！
『龍爪』！」
龍帝刀を振り下ろすと
龍の爪とも言える刃が緑の龍に襲いかかる。
『な！？
グォォォォォォォォッ！
人間に負けるとはぁぁぁぁぁぁっ！』
龍はそう叫ぶと落ちていった。
俺も今落ちている。
「これは死ぬな……」

こんなに早く死ぬとは……
救いようのない人生だったな……
そんなことを思っていると
地面に落ちた衝撃が背中に走るが
そこまで痛く無かった。
何故なら

『大丈夫？
すごいね！縁を倒すなんて！
縁は龍の中でも上級なのに！』

黒と呼ばれていた龍が俺を空中で受け止めていた。

「助かった……
ありがとう」

『礼を言うのはこちらです。
縁を止めてくれてありがとう』

「何故か勝手に身体が動いていただけだ。
あと、これはお前達龍の物だろう？
俺に龍帝？
龍を従える地位なんて大き過ぎる」

『え？
それって龍帝刀？』

「聞こえた声はそんなことを言ってたな」

『ちょ！白！』

白と呼ばれた龍は頷いて説明を始める。
『その刀は我等龍の王を選ぶ刀なのです。
その刀が選んだ者は何があろうと龍帝です』

「俺、人間だぞ？」

『人間が龍帝に選ばれたこともあります。
ある薬を飲めば龍と同じ寿命になります』

つまり、拒否権は無いから龍帝になれと
言われている訳か……
龍帝刀の力を使うと決めてしまったしな……

「分かった。俺の名は北郷一刀。
俺にどこまで出来るか知らんが
やってみよう」

『私は黒！よろしくね！』

『私は白です。よろしくお願いします』

どこまで出来るか知らんが龍の力を使えば楽が
出来るかもしれんしな。
貂蝉もこの世界は『三国志』のちょっと変わった世界だと言っていたし
今は乱世なんだろう。
乱世を治める途中であいつ等に会うことが出来るだろう。
あいつ等が覚えていなくても俺はあいつ等を影から支えよう。

そう俺は心の中で誓った。

二話　龍帝刀（後書き）

どうでしたでしょうか？
コメントがあればよろしくお願いします。

三話　宴会と殺戮（前篇）

「かじゅと様～！もう飲めませ～ん！」

「はぁ……」

「一刀様申し訳ありません……」

一応言っておくと上のセリフは黒
下のセリフは白の物だ。
え？『』↑これじゃないって？
何でも成長した龍はいろんな姿を取れるらしい。
で、人間の姿を取ってもらってる。
え？何で黒が酔ってる様な口調になってるかって？
それは約二時間前に遡るんだ……
この邑を襲っていた龍を倒した俺達に
この邑の長老が感謝の宴会を開きたいと言ってきたんだ。
何度も断ったんだが一向に折れ無くてなこっちが折れて
白と黒に龍の姿をどうにか出来ないかと言ったら人間の姿を取って
今に至る。
と、そう言う訳だ。

「黒がここまで酒に弱いとはな……」

「はい……ですから黒には酒を飲むなと言ったいるのですが……」

「言うことを聞かない訳か」

「はい……」

聞いてて可哀想になって来るな……
待てよ？俺は龍帝だから……

「黒、もう酒を飲むな」

「ええ～」

「俺は龍帝だろ？」

「うう～」

「成程」

白はそう言うと黒の周りにあった酒を片づけていく。

「一刀様～横暴ですよ～」

「うむ、確かにそうだな。
なら次から酔わない程度にしろ」

「は～い♪」

そんなやり取りで騒いでいると邑の若者らしい
男が走って来る。

「どうしたのじゃ？
そんなに息を切らして……」

「と、盗賊が……！

盗賊がこの邑に向かって！」
「何じゃと！？」
その報告と共に村人は叫び逃げ惑う。
「一刀様いかがいたします？」
「面倒なことには関わらない方が良いと思いますよ～」
「黒、お前まだ酔ってるか？」
「ぜんぜ～ん♪」
酔ってるな……
「お前は邑の防御でもしておけ。
白は俺についてこい」
「一刀様が出る幕では……」
「良いんだよ。
おい、そこの」
「はい！」
「盗賊は何人程だ？」
「二千程です！」

少ない方だな。
俺は一万（相手は全員マシンガンｏｒショットガン装備）と戦ったことあるから。

「長老、久々に美味い酒を飲んだ。
その礼でこの邑を守ってやる。
臣下の龍を一体置いて行くから
邑から出るなよ」

「なら我々も！」

「良い。
俺達だけでこと足りる」

「ですが！」

「黒、村人が出ない様にしておけ」

「了解で～す♪」

その返事を聞いて俺達は盗賊達が居る方向へと
歩きだす。
さて、俺の相手になる奴は居るのかな？

四話　宴会と殺戮（後編）

俺達は今邑の外で盗賊達を待っている。

「一刀様、何か策は？」

「策など必要あるか？
策は対等、もしくは自分より格上の
相手に使う物だぞ」

「そうですね」

そんなやり取りをしていると盗賊達が起こしているであろう
砂塵が見えた。

「ふう……」

俺は龍帝刀を抜いて盗賊達を見る。
何故かいつもは見えない筈なのに今日はその目が見えた。
獣の目だ。
俺がいつも骸にした者達の目。
大丈夫。
俺はあいつらを斬れる。

「さぁ、行くぞ。
白」

「はっ！」

白の返事を聞いた俺は走った。
ただ、獣を一掃する為に。

「ぎゃぁっ！」

「ぐはぁっ！」

「龍だ！逃げろ！」

「何だこいつ！」

聞こえる獣達の叫び声。
慣れてはいるが良い物では無い。
だが、今は後に居る村人達を守る為にこの声を聞かなくてはならないんだ……

「終わったな……」

「はい」

全ての獣達を片づけた俺達は
邑に向かって歩いていた。

「一刀様これからどうなさいますか？」

「ああ、この乱世を治める為に旅に出ようかとと思う」

「旅ですか？」

「ああ、何となくだがやらなくてはならないんじゃないかって思うんだ。
手伝ってくれるか？」

俺がそう聞くと白は跪き

「私はいつまでも一刀様のお傍に居ます」

「ありがとうな、白」

「はっ！」

そんなやり取りをしていると黒がこっちに向かって走って来る。

「終わった～？」

「ああ。
黒、早速だが旅に出るぞ」

「へ？」

「一刀様はこの乱世を治める為に旅に出ると仰ったのだ」

「そう言うことなら私も行くよ」

「そうか、ならば白！黒！

両名に命ずる！
両名はこの乱世を治める為に我と共に
この乱世で戦え！」

「「御意！」」

二人が返事をすると長老が袋を持ってこっちにやってきた。

「旅に出ると聞こえましたので。
こちらは少ないですが……」

袋の中に入っていたのは金だった。

「長老、これは流石に……」

「良いんですじゃ、村人全員の総意です」

「……そうか、ならばこの乱世を治めたらまたここに来よう！
その時はまた再会を喜び共に酒を飲もう！」

「はい！では、またいずれ」

「じゃぁね～♪」

「またいずれ」

「長生きしろよ、長老」

「ふぉっふぉっふぉっ！
あなたが再び来るまでは生きますぞ！」

「ふっ、では行くぞ。
白、黒」

「御意」

「は～い」

俺達が邑から出て姿が見え無くなるまで
村人達はずっと手を振っていてくれた。
そして、俺はまたここに来て村人と酒を飲むと
心に誓った。

作者視点のステータス（前書き）

こんにちわ～
何となくキャラクターのステータスを割り込み投稿してみます。
本当に何となくですから気にしないでください。
では、始まり～

作者視点のステータス

北郷一刀（１６）

設定

性格は冷静

プロの殺し屋で五歳の時から人を殺していた。

その才能は親戚から高く評価され『漆黒の死神』と呼ばれる。

殺し方には絶対のこだわりがあり一撃で倒すことに執着している。

殺す時には銃などは使わない。

（銃は当たり所次第で一撃で死なないから）

殺す時には刀を使う。

真正面から殺す以外に暗殺も得意。

暗殺の際にはナイフを使い頭に必ず当てる。

呂布が武力９９だとすると

一刀は本気を出せば２００を超えるだろう。

だが、それが一刀の限界では無い。

一刀はそこに気功術を加え身体能力を格段に上げることが出来る。

それを行った場合１０００は超えるだろう。

だが、一刀はそれを滅多には使わない。

理由は諸説あるが一番有力なのは身体に

ものすごい負担をかける為だと父親は主張している。

一刀が殺した人間の数は最早千万を超えているだろう。

他の世界のことを覚えている。

一刀のステータス

武力１００～２００（気功術を使えば１０００）

早さ　本気で走れば銃弾を超えることが出来る。（かもしれない）

知力５５
統率力０～７８
（０と言うのは戦場での話。
一刀は戦場で一人で戦っても問題が無いほど強いから
部隊を率いることは無い。
実際依頼の際には一人で行動する）

白（３００）
一刀の龍帝としての最初の臣下。
忠誠心が強く頭が良い。
人に何かを教える時になると興奮する。
龍の中では上級程だろう。
だが、頭が堅く黒には『融通がきかない』と言われる。
武力は呂布を９９にすると１５０程。
人の姿で一刀と戦えば良い勝負になるだろうが
絶対に勝てないはず。
一方龍の姿になると一刀の早さに翻弄され
一撃もくらわせることが出来ないだろう。

白のステータス
武力１５０
早さ　一刀程は早く無いが間違い無く馬よりは早い。
知力　７８
統率力　８８

黒（３００）
白と同じく一刀の龍帝としての最初の臣下。

いつもいい加減で酒に極端に弱い。
だが、一刀の事が気に入り一刀に害をなす者が
現れ一刀を傷つけると本気の白でさえも勝てないだろう。
武力は呂布を９９にすれば１５０程だが一刀が
傷つけられ怒れば１９０程まで上がる。

黒のステータス
武力１５０
早さ　白とほぼ同じ
知力　５５（普段はふざけているがやる気になれば一刀並み）
統率力　６７

作者視点のステータス（後書き）

こんなところです。
『どんだけチートだよ！』
って突っ込んでも構いません。
でも、一刀にだって弱点はある！（かも……）
では、また次回。

五話　王達の一刀達への評価（前書き）

こんにちわ～
今回は続きではありません。
題名の通り三国の王達の一刀への評価です。
桃香はまだ王ではありませんが気にしないでください。
一刀達は出ません。
では、始まり～

五話　王達の一刀達への評価

作者視点（第三者視点とも言う）

劉備達の評価

「北郷一刀さん……
たった一人で龍を倒した人？」

「はい、もし我等の仲間になれば我等の理想の実現を一歩近付けられるかと」

「流石に鈴々達でも龍は倒せないのだ！」

「ええ、実力は我等よりも上です」

「そっか、じゃぁ、探してみようか！」

「「はい（なのだ）！」」

孫策達の評価

「北郷一刀ね……」

「我等の仲間になれば相当の戦力が上がりますね～」
「私はその男を仲間にするのは反対だな」
「どういうこと？」
「北郷一刀は確かに強いかもしれない。
だが、我等はその性格を知らない」
「つまり、その力が私達の民に向くかもしれないってこと？」
「そう言うことだ。
我等に害をなす者かもしれない。
だから、賛成は出来ない」
「ふ～ん……
でも、その男近くに居るんでしょ？
直接会ってみましょう」
「まぁ、良いだろう」
魏の評価
「北郷一刀？」
「はい、報告では相当強いそうで」

「ふん！そんな男など片手でひねりつぶしてやる！」

「でも、龍を倒したのでしょう？
書類に書いてあるわよ？
春蘭は龍を倒せるの？」

「う……」

「ならば？」

「その男欲しいわね。
その男を捕獲しなさい」

「「はっ！」」

「ああ、捕獲の時は五体満足で連れてくるのよ？」

「「御意！」」

「ふふっ、楽しみね……
早く私の元に来なさい。
……一刀」

様々な評価の中一刀は誰の元に行くのか？
それを知っているのは神のみだろう……

五話　王達の一刀達への評価（後書き）

フラグが立ったーーー！
立ちましたーーー！
一刀は本当にどこに行くんでしょうね？
それはしばらくのお楽しみで♪
（もしかしたら誰の元にも行かないかもしれませんが…）
では、また次回。

六話　呉王との話（前篇）（前書き）

こんにちわ～
暇なので連続投稿です。
何を連続投稿するかは私のきまぐれです。
では、始まり～

六話　呉王との話（前篇）

「一刀様～ここに何しに来たの～？」

「取りあえずこの前の龍みたいな奴がどこかに居ないかの情報集めだ」

俺がそう言うと白は感動したと言う顔で

「流石一刀様です！
早速龍帝としての自覚が！」

そう言いながら涙を流した。

「真面目だね～」

「後はこの街の主に会いに来た」

「袁術にですか？」

「ああ、もしかしたら龍の情報を持っているかもしれないしな。
あと……」

「あと？」

白が首を傾けて曲がり角を曲がった瞬間刀を抜き

「さっきから俺のことをつけてたな？
大した腕だがまだまだだ」

「っ！」

！明命！？

まさか、いつもと時間軸がずれているのか？

貂蝉め……

「動いた瞬間関係無い人間が死ぬと思えよ？」

「！」

怪しまれない様に質問をしないとな……

「お前の主は？」

「孫伯符殿です」

袁術とは言わないか……

「お前の主は袁術では無いのか？

孫伯符は客将の筈だが……」

「それでも、私の本当の主は孫伯符殿です」

成程な……

忠誠心が強い……

「お前の名は？」

「周泰です」

「そうか、ならば周泰、
お前の主に会ってやる」
俺は刀をしまい敵意がもう無いことを現す。
「白も黒も良いな」
「私は一刀様の意思に従います」
「私も文句は無いよ♪」
こっちも忠誠心が強い臣下だな……
「早く行くぞ。
案内しろ」
「……はい」
こいつ本気になればこんな殺気を出せたんだな……
酒家
「こんな所に孫策が？」
「はい、あの個別部屋に」
袁術のことを気にしてるんだな。

仕方ないことだが。

「分かった。
白と黒はここに居ろ」

そう言った瞬間白は驚いた顔をして

「しかし！」

「ここに居ろ」

「御意……」

「白が入ろうとしたら止めるよ。
あと、部屋の前の監視も」

「頼む」

「は～い♪」

個別部屋

部屋の中には雪蓮は居た。
居たのだが……

「やっほ～♪酒美味しいわよ♪」

「はぁ……」

まぁ、おちゃらけているのは
天井裏のバレバレな奴を気にしてるんだろうな。
片づけるか。

「酒を飲む過ぎると身体に悪いぞ」

俺はそう言いながら龍帝刀に手をかける

「別に良いじゃない♪」

気付いていると……
俺に片付かせようってことか。
つまり、俺の実力を測ろうってか。
流石、雪蓮だな……

「お前が倒れたらお前の臣下が悲しむだろ」

ゆっくりと刀を抜き……

「ふふっ、そう言ってくれると嬉しいわね♪」

「ふっ！」

天井に刺した。

「ぐぁっ！」

死んだな……

「死んだわね♪」

「ああ、真面目な話をするぞ。
俺は後で良い。
お前の話をしろ」

「ええ♪」

まさか、飲み過ぎてるのか？

「酔って無いわよ～♪」

「そうか、なら早くしろ」

「ええ」

雪蓮が頷いた瞬間周りの空気が一気に変わる。

「じゃぁ、話しましょうか」

「ああ」

そして、俺と江東の小覇王との語り合いが始まった。

緊急アンケート実施

どうもSです。
今回は題名の通りアンケートを行います。
実はこの物語でいくつか決まっていないことがあるので。
皆様に決まっていないことを決めて頂こうかと思いアンケートを実施しました。
このアンケートで決めて頂くことは四つです。

一どこの√にするか

二誰をメインヒロインにするか

三孫策を殺すか殺さないか

四華雄を殺すか殺さないか

以上の四つでございます。
よろしくお願いします。
質問などがございましたらコメントにてよろしくお願いします。
では、また次回。

七話　呉王との話（後編）

「まず、聞きたいのはあなたは龍を倒したって聞いたけどそれって本当？」

予想範囲内の質問だな。
詰まらない……

「その前に一つだけ言っておく」

「何？」

話をそらされたから不機嫌そうだな。
ま、言っておかないといけないか。

「これから俺が答えることは全て真実だ。
そう言っておかないとお前は疑問を持ってこの会話を終了することになるからな」

「分かったわ。
で、質問の答えは？」

「真実だ。
だが、その時は二体龍が居て
そいつらが弱らせていたから倒せた」

「あなたは何の為に旅に出ているの？」

これも予想範囲内。

試しているにしては簡単だな。

「旅に出ている理由は二つだ。
一つは龍帝として大陸で暴れている龍を鎮める為。
もう一つは……」

「ちょっと待ってその龍帝って言うのは？」

予想通りの反応。
本当に詰まらない……

「龍の皇帝みたいなものだと思ってくれればいい。
この刀に選ばれた者がなれる者だ」

そう言って龍帝刀を見せる。

「人間でもなれるの？」

「刀に選ばれればな」

「そう。
もう一つは？」

「この大陸の乱世を治める為」

雪蓮は驚いた顔をしている。
龍を従える者がこんなことをするとは
思わなかったのだろう。

「あなた龍帝でしょ？」

「ああ、その前に一人の母親から生まれた
一人の人間さ。
情はちゃんとある」
敵に容赦が無いだけだ。
「そう……
あなた私の元に……」
「断る」
「へ？」
「理由は二つ。
表に立っている俺の二人の臣下は龍だ。
俺が命令すれば確かにお前は天下を取れるだろう。
だが、それでは詰まらない」
「そうね。
あともう一つは？」
「俺は認めた相手にしか仕えない」
「私は認められていない？」
「ああ」
嘘だ。認めてはいる。
だが、断る為にあえてこう言った。

「そう……
私の質問に答えてくれた礼として
あなたも質問して良いわよ」

「ならば、この近くで龍を見かけたと言う情報は無いか？」

「近くかどうか分からないけど洛陽の近くの邑で
龍が暴れているそうよ。」

「そうか。
袁術の所に行く手間が省けたな。
ありがとう」

「いいえ～♪
でも、あなたのことは絶対手に手にいれるから」

華琳みたいだな。
だが……

「手に入れてみろ。
俺を使いこなせなくて
死ぬのはお前だがな」

俺は立ちながら少し殺気を込めて言う。
この程度耐えられなければ
俺を使いこなすなんて無理な話だ。

「っ！」

耐えられるが動けないってか。
まだまだだな。

「じゃぁな」

そう言って部屋から出る。
すると白と黒が心配安心した様子で
俺に駆け寄ってきた。

「一刀様！大丈夫でしたか！？」

「ああ、それより洛陽の近くの邑で龍が暴れているらしい。
行くぞ」

「御意！」

「は～い♪」

そして、俺達は洛陽の近くの村に居る
龍を鎮める為に俺達は洛陽へ向かった。

一刀達が居なくなってから雪蓮ｓｉｄｅ

「北郷一刀ね……」

あの男は危険だ。
あの覇気は並みの男が出せるもの
ではない。

私達の敵になったらとことん私達を潰しにかかるだろう。

「くすくすくす……
久しぶりに私が全力で
潰したい相手が見つかったわ」

絶対に潰してやるわ。

「くすくすくす……
あっはははははは！」

七話　呉王との話（後編）（後書き）

一刀も厄介な種を育てちゃいましたね……
アンケートの途中結果ですが
√は一番は董卓軍
メインヒロインは月
雪蓮と華雄は殺さないと
こんな感じです。
まだ、意見を集めていますので
よろしくお願いします。
では、また次回。

八話　龍帝とは何たるか

『龍帝とは何たるか、ですか？』

俺達は今洛陽の街に向かっている。
白と黒は龍の姿になり俺は白に乗っている。

「ああ、俺は何も知らない内に龍帝になっただろう？
だから、取りあえず聞いておきたくてな」

『一刀様は真面目だね～』

黒は笑いながら茶化している。

「俺は龍を統べる者になる者としてその
役目や特徴などを聞いておきたいんだ」

何も知らないまま王になるのは嫌だからな。
すると白が

『うう……一刀様！
この白！感動しました！』

そう言いながら白は片手で両目を覆い涙を隠している。

『分かりました！
この白が一刀様に龍帝について
説明致しましょう！』

テンションが一気に高くなったな。
まさか、白ってこう言うキャラなのか？
黒が憐みの目でこっちを俺を見ているが
どうしてだ？

『良いですか？まず、一刀様には龍のことについて
ご説明しましょう。人間は龍は不老不死だと言います。
ですが、龍も死にます。
千年経てば死ぬ確率は高くなります。
今、私達が知っている中で最長老の龍は初代龍帝様の
五十三万歳です。
次に龍の仕事ですが龍は様々な物を司っています。
色でそれを見分けることが出来ます。
私は光。黒は闇です。
次に龍帝になっての仕事ですが龍帝の仕事は至極簡単です。
龍帝は龍の報告を聞くだけで良いんです。
ですが、もし、龍が司っている物に異常があれば龍帝様が
指示をするのです。
何かご質問は？』

「一つだけある」

『何でしょう？』

「俺がこの前倒した……『緑ですね』は察するに森だろう？
森はどうするんだ？」

『ああ、そのことについてご説明していませんでしたね。
龍は死んだら龍の魂は龍帝刀に行きます。
龍帝刀を抜いて緑を呼んでみてください。

生き返りますから』

「呼んだ瞬間襲われないだろうな？
あいつ、人間を嫌ってる風だったぞ？」

この不安定な足場で襲われたら不味いぞ……

『大丈夫です。緑は龍帝に絶対の服従を誓っています。
十代前に人間の龍帝に救われそれ以来五代前に人間が
龍帝になっても服従していました』

「そうか」

じゃぁ、襲われることは無いな。
俺は龍帝刀を抜き緑を呼ぶ。

「緑、この刀に眠る魂よ我と共に龍を統べる王道を進め……」

『『！』』

白と黒が驚いた顔をしたが俺は何か間違えたか？
そんなことを思っていると龍帝刀が光る。

「っ！」

眩しい光に目を瞑る。
そして目を開けるとそこには緑が居た。

『お前は私を倒した……！』

緑が構えると黒が

『緑、この人は龍帝だよ』

『なっ！』

『それでもやるって言うなら……』

何て言う殺気だ……

俺でなければ気絶してるぞ。

『このお方が！？

申し訳ありません！』

緑は全力で謝っている。

何だか、罪悪感が……

「別に良い。

知らなかったなら仕方ない。

その代わり俺が龍帝の間人間を襲うな。

そして、俺に仕えろ」

『御意！』

本当に白の言った通りだったな……

最後はついでだったが。

『一刀様、これで龍帝についてご理解頂けたでしょうか？』

「ああ、理解した。

では、行こうか」

『『『御意！』』』

八話　龍帝とは何たるか（後書き）

まだまだアンケートの意見を集めています。
よろしくお願いします。
８／１２
１７：１２追記しました。

九話　邪龍

『一刀様！見えました！』

前方約五キロ程に暴れている龍が見える。
あれは……戦っているのか？
俺の心を読んだのか緑が

『陛下（緑の一刀の呼び方）の目では見えませんでしょうが
あの者は人と戦っております』

「何！？じゃぁ、前の緑みたいなものか？」

俺がそう聞くと三人はつらそうな顔をして答える。

『一刀様には言わなかったけど龍は全てが
何かを司る訳じゃないの。
何かを司っていない龍は龍帝に呼ばれる可能性が低い。
龍にとって人間の肉は自分の寿命を延ばすのにぴったりな
物なの。
でも、人間の肉を食べたらその龍は『邪龍』になる。
邪龍は死んだら龍帝刀に魂を吸収されない。
転生の輪廻の輪に加わるの。
でも、大抵の龍は龍が最高の生き物だと思っている。
だから、転生したくない。
だから、人間の肉を食べる』

俺が緑を見ると白が何か言いたそうだったが緑が
それを目で制して緑が言う。

『陛下、私が人間を殺していたのは長く生きたいと言う
欲望では無く龍を悪い者だと決めつける人間が居るからなのです。
ですが、陛下の命ならば耐えましょう』

緑は仲間の為に……
目の前で暴れている龍は己が死にたくないから……

「緑、今ここでもう二度とお前が生きている間
ずっと人間を襲わないと誓え」

『誓います。
もう二度と人間を襲いません』

「良し、ならば行くぞ」

『『『御意！』』』

邑

邑に着いた俺が見たのは緑が言った通り龍と戦う人間達の姿。

「あれは……」

兵を率いているのは華雄か……
猪だから作戦などとらずに真正面から
戦っているのか。

『陛下、人間がこちらを見ていますが……』

「しまった……今、人間にとって龍は敵でしか
無いだろう？更に龍が来たら混乱するのは当たり前だ」

俺の判断ミスだな。
焦って白達に龍の姿をとらせたのは
不味かったか……

「白！黒！緑！全力で戦うぞ！
白は俺が上に乗っているからって気にするな！」

『『『御意！』』』

黒は爪に黒い物（闇を司ると言っていたから恐らく闇だろう）を宿し邪龍に向かって飛ぶ。

『くらえぇっ！』

邪龍はそれを上に飛びかわす。
だが、そこには緑が居た。

『くらえ！』

緑は何も爪に宿していないがそれでも威力は十分なのだろう。
邪龍を斬り裂く。

『ギャァァァァァァァ』

龍は断末魔をあげ逃げようとする。

だが、その先には俺を乗せた白が居た。
『一刀様、いかがなさいますか？』
俺は少し考えてこう言った。
「龍帝として俺が裁きを下す」
その答えを聞いた白は一言
『御意』
そう言った。
俺は邪龍白の上を走り白の頭まで
行くと邪龍に向かって跳んだ。
そして、龍帝刀を振り上げた。
「転生の輪を巡れ！『龍爪』！」
龍帝刀から出た龍の爪が邪龍に襲い掛り
邪龍は吹き飛び動かなくなった。
そして、俺は落ちている。
「またか……全く……」
呆れていると白が俺を受け止めてくれた。
「ありがとう、白」
『いえ、一刀様は大切なお方ですから」

白は良い奴だな。
そんなことを思っていると
黒と緑がこっちにやって来る。

『陛下、この後いかがいたします？』

「下に居る人間と話をしよう。
下に降りたら人間の姿をとってくれ」

『『『御意』』』

そう返事をした三人は俺が降りやすい
高度まで下がり俺は地面に降りた。
それと同時に三人は人の姿をとる。

「そちらの兵を率いている者と話がしたい。
俺は龍を統べる者、龍帝と言うらしい。
名は北郷一刀。
こいつらは俺の臣下、左から白、黒、緑だ」

兵士達は驚いた顔をして少し話しやはり華雄が出てきた。

「私の名は華雄と言う。
あなたが天の御遣いか？」

この世界にも天の御遣いの予言があるのか。
しかし、俺では無い可能性があるし少し話を聞くか。

「天の御遣いと言うのがどう言う者か

分からない。どう言う意味だ？」

「管輅という占い師の予言で
『龍帝と言う者。
それは天が使わした御遣いなり。
御遣いはこの乱世を治めるであろう』
と言う予言だ」

龍帝って言ってるから俺だな。
少し白達と話をするか。
俺は白達に向き直り話をする。

「龍帝って言ってる時点で俺だよな？」

「恐らくは」

「陛下が天から来たお方だったとは……」

「一刀様すご～い♪」

まともな意見は白だけか……
嘘をついてもしょうがないか……

「俺は確かに龍帝だ。
だから、その管輅の言う天の御遣いは
俺なんだろう」

華雄はまた兵達と少し話しこちらに向き直る。

「御遣い殿には我が主董卓に会って頂きたい！」

月か……
あいつは良い奴だって分かってるから良いか。
「分かった！
会おう！
だが、我が臣下も連れて行くが構わないな？」
「構わない！」
「白、黒、緑も構わないな？」
俺は三人に向き直り聞いた。
「一刀様の意思ならば」
「構いません」
「良いよ～♪」
三人の返事を聞くと華雄が
「そろそろ、出発だ！」
「分かった！
白、黒、緑皆に合わせて飛べ」
「「「御意」」」
三人は龍の姿をとり俺は屋根まで飛んで屋根の上から

白の背中に乗った。

それを見た華雄は少し驚いた顔をしたが
すぐに普段の顔をして

「出立！」

そう叫んだ。
そして、俺達は洛陽に向かった。

九話　邪龍（後書き）

今のところ√は董卓軍
メインヒロインは月
孫策も華雄も殺さないと
結果は変わっていません。
まだまだ、コメントを集めています。
コメントよろしくおねがいします。

十話　董卓との出会い

俺達は今華雄に連れられて董卓が治める洛陽を歩いている。

「一刀様～ここ良い所だね～♪」

「ああ、活気があるな」

それに民は良い気を発している。
大抵人間は生活をする中で気を発している。
その気は身体の調子や精神状態によって変わる。
ここに居る民は心身共に万全だ。
そんなことを思いながら歩いていると城に着いた。

「おっきい～♪」

「確かに……」

「大きいですな……」

三者三様の反応。
こいつ等は見てて飽きないだろうな。

「では、我が主、董卓を紹介しよう。
着いて来てくれ」

「ああ、三人共、唖然としてないで着いてこい」

「「「はっ！思わず……」」」

本当に飽きないだろうな。

玉座の間

華雄に連れられ来たのは玉座だった。
玉座には将達が各々武器を持っている。
大して俺にとっては恐怖の対象にはならないが。
そんなことを思っていると二人の少女が玉座にやって来た。

「あなたが董卓か？」

俺は知っているがこの子は俺を知らない。
だから、知らない風を装う。

「ちょっと！あなた月に向かって失礼でしょ！」

詠は相変わらず月に関することになると冷静さを失うな。

「俺は龍帝、つまり龍の王だ。
今は王同士の話をしている。
関係無い奴は下がってもらおう」

「あんたっ！」

詠は何か言おうとするが月が目でそれを制する。

「詠ちゃん、今のは詠ちゃんが悪いよ。
龍帝殿私が董卓です。
わざわざこの様な所に出向いて頂きありがとうございます」

「いや、ここは良い所だ。
活気があり民には笑顔がある。
この乱世の中ここまで笑顔があるのは珍しい。
あなたは良い人のようだ」

「いえ、そ、そんなことは……」

俺がそう言うと月は顔を赤くし
俯く。

「謙遜か？
そんなことはしなくて良い。
謙虚なのは良いことだがな。
あなたは本当に良い人なのだから
胸を張っても罰は当たらないだろう」

「本当に私はそんなに良い者では無いのです。
ただ、民の為に何かしたい……
その一心なのです」

「その心があるだけでも十分だ。
権力を握りながらその様な心を持っている人は
十分良い人と言えるだろう」

「ありがとうございます。
ところで、あなたはこれから

どうするおつもりですか？」
月は顔を引き締めて言う。
「適当に旅に出てこの大陸で暴れている
龍を鎮めたいと思っている。
それに、この乱世を治めたいとも……」
「乱世をですか？」
「ああ、俺は目の前で困っている人を放っておける程
薄情では無いからな」
「ここにはどのくらい滞在しますか？」
そう言えば考えて無かったな……
旅にもアジトが必要かもしれないな……
ここは都会の方だし情報もたくさん入って来るか……
「旅にも本拠地が必要だろう。
龍の情報もここなら入りやすいだろう。
そろそろ根を降ろそうかと思う」
「そうですか」
「ああ」
そろそろ野宿をやめたいしな……
「それと、ここの客将をしたいんだが……」

「どうしてでしょう？」
「仕事無しで生きられるなんて思って無いしな」
「成程、分かりました」
月がそう言うと詠は慌てた顔をして
「月！正気なの！？こいつを信頼出来るの！？」
「詠ちゃん、この人は悪い人じゃないよ」
「そんなの……！」
「ええんやないの？」
「霞！？」
「うちは月の言うことに従うわ」
「私もだ」
「……恋も」
「ねねは恋殿に従いますぞ！」
将達にそう言われて詠は呆れ顔だ。
「分かったわよ。

詠の言うことに逆らうなんて出来ないしね」

「ありがとう、詠ちゃん」

「これからよろしく頼む」

俺はそう言って手を差し出す。

「こちらこそよろしくお願いします」

月も手を差し出し俺の手を握った。

十二話　盗賊討伐

俺は今荒野に来ている。
前に居るのは二千の盗賊達。
後に居るのは龍の三人。
何故こんなことになったかと言うと
約三時間前に遡る。
盗賊が近隣の邑を襲っているということで
玉座の間に呼ばれた。

「揃ったわね」

俺を見た詠の表情はそうとう機嫌が悪そうだった。

「盗賊達の数は二千。
近隣の邑を襲い食料を奪おうとしている」

嫌な予感が……

「この盗賊達は最近客将として入った北郷に頼むわ」

詠がそう言うと緑は顔を怒りの色で染め上げた。

「貴様！陛下にそのようなこと！」

「俺は別に構わない。
白、黒、緑はついてこい」

「陛下！このような……！」

まだ、不満か。
しょうがない……

「命令だ」

「……御意」

そう言って緑は渋々承諾してくれた

「二人は？」

俺はそう言って白と黒を見る。

「我等は一刀様の言うことに従います」

「私も～♪」

と、こんな感じで盗賊の討伐に来ている。
ま、龍が居るとは言えたった四人で討伐したら
認めてくれるだろう。

「行くぞ、白、黒、緑は龍になれ」

「「「御意（は～い♪）」」」

三人はそう返事をして龍になった。

盗賊達は驚いて騒いでいる。

「下賤な盗賊達よ！
我は龍帝北郷一刀！
汝等を裁きし者なり！
汝等にこの世の地獄を見せてやろう！」

俺がそう叫ぶと盗賊達は更に驚く。

『北郷一刀だって！？』

『確か俺達と同じくらいの盗賊を斬ったって……』

『しかも、龍が味方だぞ！勝てる訳ねぇ！』

『逃げろ！』

逃がす訳無いだろうに……

「白！黒！緑！絶対に逃がすな！
一人残らず殺せ！」

『『『御意！』』』

三人の返事を聞き走る。
盗賊達を逃がさない為に。

一人残らず討伐し洛陽の城

「帰ったぞ」

「はや！あんた本当に討伐して来たんでしょうね！」

「当たり前だろう。
生首でも持ってくれば良かったか？」

そんなの持ちたくないが……

「そんなの絶対に持って来ないでよ！」

「分かってる。そんなの董卓殿に見せたく無いからな」

「……分かってるじゃない」

「董卓殿は優し過ぎる。
あの優しさは自分も傷つける」

「ええ、そうよ」

「その未来が予想出来たから俺は支えようかと思ったんだ」

「あんた……」

「俺は自分の部屋に戻る。
またな」

そう言って部屋に戻ろうと後を向くと

「詠よ」

「？」

「ボクの真名をあんたに預けるわ」

「そうか、だが、天の国には真名は無い。
だから、俺のことは一刀と呼べ」

「分かったわ。
用事はそれだけよ、一刀」

「じゃぁな」

「ええ」

その返事を聞いて俺は今度こそ自分の部屋に戻る。
その時の足取りは本当に軽かった。

十三話　とんでもない拾い物（前篇）

俺は今街に来ている。
この状況を説明すると前回の賊討伐の時に結果を出した為
詠から休暇が与えられたのだ。
因みに護衛は連れて来ていない。
折角の休みなのに護衛なんて居たら息が詰まるだけだ。
……とは言っても俺はただ休暇を楽しむ為に街に来ている訳じゃない。
どこからか知らないが嫌な気が発せられている。
その気がどこから発せられているのか。
どうして発せられているのかを解明する為に街に来ている。

「この距離は……城門か？」

嫌な予感がする……
少し走るか……

城門

第三者視点

城門には二人の男が居る。
二人の男は馬車に二人少女を乗せている。
馬車には縛られた一人の少女が居る。
少女は必死に抵抗している。

「離せ！」

「うおっ！暴れんじゃねぇよ！」

「ったく、気性の荒いお嬢さん方だな」

「協！起きろ！協！」

少女は必死に協と呼ばれた少女を起こそうと叫ぶが
少女は起きない。

「早く乗せろっての」

「分かってるよ！」

男は少女の首に手刀を当てて気絶させる。
そして、馬車に乗せる。

「ふう、苦労したぜ～」

「全くだ」

男は馬車の扉を閉める。
まだ、男は気付いていない。
死のカウントダウンがすぐそこに迫っていることに。

「早く出発しようぜ」

「そうだな」

男達が出発しようとしたその時声がかかる。
「待て」
「何だ？」
声をかけたのは一刀だった。
「お前達、馬車の中を見せてもらおうか」
「はぁ！？お前に何の権利があって言ってんだ！？」
「俺は董卓の客将だ。
早くしろ」
男達は悟った。
この男は全て知っている。
自分達が何を言おうと馬車の中を見ようとする。
だから、見る前に殺してしまった方が良い。
「ああ、その前に……」
「何だ？」
「死んでもらうぜ！」
男は短剣を取りだし一刀に突っ込む。
そして……

ファァァァァン！
そんな音と共に男の首が飛んだ。
「ひぃっ！」
一刀の手には龍帝刀があった。
一刀はそれで男の首を刎ねたのだ。
一刀はもう一人の男に刀を向けてこう言った。
「さっさと消えろ、屑」
「わ、分かった！消える！」
男はそう叫んでその場から走って行った。
一刀は刀を鞘に戻し馬車に向かって歩き出す。
馬車の扉を開けるとそこには先程の少女達が居た。
「やはり人攫いか……
どの時代にも居るものなんだな」
一刀はそう言いながら馬車の中に入る。
「起きろ、起きろ、もう、賊達は片づけたぞ」
一刀はそんなことを言いながら少女を起こす。
「ん……」
「起きるか？」

「んん……」
少女はゆっくりと身体を起こす。
「大丈夫か？賊は片づけた」
「お主は？」
「董卓の客将の北郷一刀。
龍帝とか言われてるな」
「そうか、お前が……協！」
少女は隣に居た少女を見た瞬間に叫ぶ。
一刀は少女の様子を見る。
「大丈夫。気絶しているだけだ」
「そうか、良かった……」
少女はそう言って安心した顔をした。
「ところでお前は名前は何と言う？」
「私は劉弁、妹は劉協だ」
一瞬一刀は驚いた顔をしたがすぐに顔を戻す。
「失礼しました。まさか、皇族の方とは思わず」

「いや、助けてくれたからいい。
……それに、かっこいいし」

「ん？」

最後の方は声が小さく聞こえなかった。

「何でも無い！それにお主は龍帝、つまり龍の王であろう？
同じ王同士だ」

「ああ、そうか。
それより、龍弁」

「何だ？」

「俺は今董卓の客将をしている。
董卓に会ってくれ無いか？」

劉協は少し考えこう言った。

「……信用出来るのか？」

「出来る」

即答だった。

「……分かった。
会おう」

「劉協は俺が運ぼう」

「頼む」

一刀はそう言って劉協を担ぐ。

そして、一刀達は月の城へと歩きだした。

十四話　とんでもない拾い物（後編）

俺は今玉座の間に居る。
玉座にはいつも月が座っているが今日は
劉弁が座っている。
劉弁は最初は月に座らせようとしたが劉弁は皇帝なので最終的には
劉弁が座ることになった。
え？劉協？
劉協は……

「♪」

「あの、劉協殿？」

「もう！一刀ってば～私のことは呼び捨てで良いって言ったでしょう？」

「じゃあ、劉協、何で俺の膝の上に乗ってるんだ？」

そう劉協は俺の膝の上に乗っている。
劉協は起きた瞬間俺を見て開口一番に
『かっこいい！私の夫になって！』とか言い出し
真名を俺に教えようとした。
しかも、俺が助けたってことを知った瞬間
『本当に夫になって！』
と、言い出すから俺と劉弁で宥めた。
だが、恋人になってくれないと泣くと言われしょうがなく
恋人ってことでおれた。
で、恋人なら膝の上に乗るって言って俺の膝の上に乗っている。

「良いじゃない！恋人なんだから！」

「はぁ……白、始めろ」

「はい！劉弁殿と劉協殿を誘拐しようとした者達の遺体には
手掛かりになるような物はありませんでした」

「どっかの誰かさんが殺さずに捕獲するか
逃がさずに捕獲してれば良かったのにね」

詠はジト目で俺を睨んでいる。

「す、すまん、詠」

「ふんっ！」

完全に機嫌を損ねたな……

「そうですね～一刀様が護衛を引き連れていれば一刀様も殺さずに
すんだかもしれませんね～」

白もかよ……

「すまない……」

「まぁ、良いです。
次から護衛は引き連れてください」

「ああ、分かった」

「あははは！一刀様が白に負けた～！」

「うるさい。これから劉弁達はどうするんだ詠？」

「まず、ここに居た方が良いわね。
ここには一刀達が居る。
一刀と龍の護衛があれば問題無いわ」

「だな、劉弁、劉協、お前達の護衛に緑と黒をつける。
安心出来る二人だ」

緑と黒は立って自己紹介を始める。

「緑です。陛下の命により全力でお守りします」

「黒だよ♪誰にも二人には絶対に傷つけさせないから安心してね♪」

そう言って二人はお辞儀をして席に座る。

「よろしく♪黒さん♪緑さん♪」

「よろしく頼む」

「四人が自己紹介をしたところで軍議は終了よ」

詠がそう言うと全員席を立つ。
すると、月と董卓の武将は俺の所に来る。

「どうした？お前等」

俺がそう聞くと霞が前にでてくる。
「一っちは詠に真名許されたん？」
「一っちって何だ？まぁ、許されたぞ」
「なら、うちらも許すうちは霞や」
知ってるんだけどな。
「そうか、よろしくな霞」
「おう！」
次は月が出てくる。
「私は月です」
「ああ、よろしくな月」
月も知ってる。
「はい」
次は恋が出てくる。
「……恋」
「よろしくな、恋」

恋も知ってる。

「……ん」

恋のしゃべり方は変わらないんだな。
次はねねが出てくる。

「恋殿が許すならねねも許すのです！
ねねはねねねです！言いにくかったらねねでも良いですぞ！」

「よろしくな、ねね」

早速言い難そうなのでねねと呼ばせてもらう。
次は華雄か。
華雄は知らないな……

「私は真名を呼ばれるのは好まない。
一応教えるがこれからは華雄と呼んでくれ」

「分かった」

俺の返事を聞くと華雄は俺の耳に口を持ってきて俺にだけ
聞こえるように言う。

「私の真名は美幸だ」

「ああ、よろしくな、華雄」

俺がそう言うと美幸は満足したように頷く。

俺は席を立つ。
「俺は自分の部屋に戻る。
また、明日な」
「おう！また明日の！」
俺は霞の返事を聞いて自分の部屋に向かった。

その途中

「ふう……そろそろ俺の道筋を決めた方が良いかもな」
董卓につくか……
それとも旅に出るか……
反董卓連合とは戦う気ではいるがそれからの
ことは全く考えていない。
「俺が創る物語は『俺』が見た物語ではあってはいけない。
今までに無い俺が望む物語を創る。
その為にも……」
早く心を決めた方が良いな……

十五話　黄巾党の乱の始まり

俺は今霞と華雄と共に荒野に居る。
何をしているかと言うと戦だ。
事の始まりは約三時間前。
城に一人の兵士が来てこう言ったんだ。
『洛陽の近くで盗賊が暴れている』
この報告により賊討伐をすると決定し
こうして、霞、華雄、俺の三人で出陣しているんだ。
え？白はどうしたって？
俺が白は城で留守番してろって言ったんだ。
久々に暴れたいからな。
散々文句を言われた上に今は全然暴れられて無いけどな。
敵が弱過ぎるんだよ……
戦が始まってからまだ一時間半しか経ってないのにもう
撤退を始めてるし……

「華雄、霞、敵はもう撤退を始めた。
これ以上はやってもこっちが疲れるだけだ。
こっちも帰るぞ」

「うむ、確かにその通りだな。
華雄隊！撤退するぞ！」

「せやな。張遼隊も帰るで！」

華雄と霞がそう言うと二人の部隊は撤退を始める。

「一っちも部隊率いたらどうなん？

実際一っちの下に付きたいって奴等も居るんよ？」
華雄も頷いて言う。
「兵達が一刀の鍛練を見ているところを見たこともあるな」
「俺はそう言うのは無理なんだよ。
それに、俺は客将だ。
正式の将になったら考えるさ」
もうすぐどうするかは嫌でも決めることにからな……
「そうかい。でも、あんま、一っちの下に付きたい奴等をじらすちゃいかんよ？」
「ああ、分かってる」
二人共部下思いの良い奴等だな。
おっと！忘れるところだったな。
俺は胸ポケットに入れていた物を取り出す。
それは、黄色い布。
つまり、黄巾党の証だった。
「これは？」
「敵から奪った物だ。
敵の全員が付けてた」
「そちらもか」

「『も』ってことにはそっちも？」

「ああ」

「こっちもや」

二人共そう言って黄色い布を取り出す。

「これ何やろうね？」

「うむ、一刀。これは何だと思う？」

俺は少し考えてこう答えた。

「天の国では付けている色で自分達を表している者達が居た。
恐らくそう言うことだろう。
こいつ等は『黄巾党』とでも名前をつけておこう」

ばっちり歴史通りだが問題は無いはずだ。

「うむ、特徴を掴んではいるな。
そう名づけよう」

「せやな。一刀も良い名前付けるもんやな～」

歴史知ってるからなんて口が裂けても言えないな……

「では、帰るぞ。
董卓様を心配させてはならん」

「せやな。月っちは心配性やからな」

「ああ、俺の所にはうるさい臣下が居るからな」

「あはははは！白っちも心配性なんよ」

「あれはうるさすぎなんだよ」

「あっはははは！白っちに言いつけるで～」

「やめろ……」

そんなやり取りをしながら俺達は城へと帰っていった。

洛陽の城

「お帰りなさい！皆さん！」

帰ってきて一番最初に聞いたのは月の声だった。

「ただいま～月っち」

「ただいま帰りました。董卓様」

「帰ったぞ」

俺達の無事を見ると月は安心した顔をする。

その様子を見てやっぱり月は心配性だなと思いながら
俺は詠を呼んだ。

「詠、敵からこんな物を奪ったんだが……」

そう言って黄色の布を渡す。

「最近多くなってるのね」

「ん？どう言う意味だ」

黄色い布を放り投げながら詠は答える。

「最近黄色い布を付けた奴等が邑を襲うって情報が多いのよ」

「成程な。一応俺達の間では黄巾党と名づけておいた。
名前が無いよりましだろ？」

「そうね。一刀、あなたはどうするべきだと思う？」

俺は少し考える。
今までの世界で漢王朝は対応が遅かった。
だが、今回は始まったばかりだ。
今回なら対応が遅いなんて言われないだろう。

「劉弁はどこに？」

「部屋よ。……あんた何する気なの？」

「皇帝の妹の恋人として当然のことを……」

詠は呆れた顔をしながらこう言った。

「行きなさい」

「ああ」

俺は劉弁達の部屋へ向かって歩き出した。

劉弁の部屋

「俺だ、入るぞ」

「一刀？入ってくれ」

俺はその返事を聞いて部屋に入る。

「一刀、何の用だ？」

「最近黄色い布を付けた奴等が邑を襲っている」

「ああ、詠から聞いた」

詠はもう真名を預けていたのか……

「俺達はそいつ等を黄巾党と名付けたんだ。

これは俺の勘だが……」

「何だ？」
「黄巾党は相当大きくなる。
大陸を脅かす程に」
「！それで、一刀は皇帝である朕に何にをして欲しいのだ？
龍帝殿」
「黄巾党を討伐せよと勅令を出して頂きたい」
劉弁は驚いた顔をしたがすぐに笑顔になりこう言った。
「良かろう。我が妹の恋人の頼みだ。聞き入れよう」
「ありがとう」
「その代り！」
「ん？」
劉弁は顔を赤くしながらこう言った。
「私のこ、こ、こい、こい、恋人になってくれ！」
予想外の発言だな……
まさか、皇族二人に惚れられるとは……
「分かった。これからもよろしくな、劉弁」
「ああ」

耳まで真っ赤にした劉弁は本当に可愛かった。
ところで、皇族二人の恋人になった奴って恐らく世界で初めてじゃないか？
色んな意味ですごいな俺……
臣下は龍で恋人は皇族二人って間違い無く俺だけだろう。
滅多に体験出来ないことだな。
そんなことを思いながら俺は劉弁の部屋から出て自分の部屋に向かって歩き出した。

十六話　勅命により集まった者達

劉弁が勅命を出してから一週間が経った。
勅命には各諸侯が協力せよとあり各諸侯が
一度集合しなくてはならない。
俺達は今集合場所に向かって馬を走らせている。
え？何で白達に乗らないのかって？
最初は白達に乗る予定だったんだがそうすると
兵達が運べないし将達が最初に着くのは不味いと言うことで
馬に乗っている。

「それにしても白達は馬に乗るのが美味いな
龍なんだから馬に乗ることなんて無いだろう」

「長く生きていると色々あるんですよ、一刀様」
「そうだよ～」
「そうですよ、陛下」

「そうかよ」

色々って何だ色々って。

「一っち～そろそろ着くで～」

霞にそう言われて視線を前に向けると確かに前方に陣が見える。
先に着いていた諸侯だろう。
今更だが董卓軍からは俺、霞、詠、それに龍三人となっている。

「ふむ、参加者は分かっているのか？詠」

「えっと、曹操、袁紹、袁術、孫策、それに、義勇軍の劉備ね」
やっぱり主要の三人は来ているか。
「急ぐぞ。勅命を持っている俺達が遅れたら不味いからな」
「「「御意！（は～い♪）（おう！）（分かってるわよ）」」」
集合場所
「ボク達陣営を作っておいて。ボク達は軍議に行くから」
「はっ！」
「詠、軍議には誰が出るんだ？」
「ボクが出るのは当たり前でしょ？あとは、霞、一刀も出てもらうわ」
「良いのか？」
客将の身分で軍議に出るのは……
「良いの、あんたはあんたがボク達の軍に居るってことを示す為に連れて来たんだもん」
「なら、恋も連れてくれれば良かっただろうに……」

「恋は切り札よ。あんたの強さはあんまり知らないけど恋の強さは知ってるからね」

「そうかよ、なら軍議に行くぞ」

「ええ」

「霞！逃げるなよ」

「うっ！」

俺は霞を引きずり軍議が行われる天幕へと歩き出した。

「一っち～！許して～な～！」

「うるさい」

軍議が行われる天幕

「お待たせいたしました。董卓軍、軍師の賈駆です」

詠が敬語を使うと何故だか違和感が……

すまん……俺が悪かった。

悪かったから睨まないでくれ、詠。

「うちは董卓軍の武将の張遼や」

「俺は董卓軍で客将をしている北郷一刀と言う。
成り行きで龍の王、龍帝になった者だ」
俺が名乗った瞬間その場がざわつく。
詠は一つ咳払いをし俺に目配せをする。
……俺に黙らせろと？
全く……
「今から喋った瞬間、首を刎ねるぞ」
殺気は込めていないが脅しには十分使えたのだろう。
全員黙ってしまった。
「訂正だ。今から自己紹介に関係無いことを喋った奴の首を刎ねる」
俺がそう言った瞬間桃香が立ち自己紹介を始める。
「ぎ、義勇軍の劉玄徳と申します！」
「はわわ！諸葛孔明でしゅ！」
「あわわ！鳳士元でし！」
相変わらず二人はカミカミなのな……
三人の自己紹介が終わると今度は美羽が立つ。
「わ、妾は袁公路なのじゃ！」
「わ、私は張勲です！」

二人共緊張してるな。
俺の所為だが……

「孫伯符です」

流石雪蓮と言ったところか。
全く怯えていない。

「わ、私は袁本始ですわ」

「ぶ、文醜っす！」

「が、顔良です！」

この三人に脅しなんて効かない思っていたんだがな……
ここに居る全員に悪いことをしたか……

「曹操よ。後の二人は夏候惇と夏候淵」

流石覇道を行く者だな。
雪蓮と同じく全く動じない。
何故か得物を狙う目で俺を見ているが……
おっと！自己紹介は終わったか。

「自己紹介が終わったところで勅命を読む。
聞け」

俺は胸ポケットから勅命の書かれた書簡を取りだし
それを読む。

「内容は簡単だ。『黄巾党を滅ぼし民の生活を元に戻せ。頭領のことにかんしては一番に見つけた者の好きにせよ』簡単だろ？」

「どう言う意味ですか？」

「盗賊とはいえ大人数の人間を統率している人間だぞ？そんな人間が居れば軍の統率力が上がる筈だ。その統率力を一番に見つけた奴にやると言ってるんだ。これは頭領の似顔絵だ」

俺は胸ポケットから似顔絵だと言われて渡された絵を取りだす。

「……あの」

「何も言うな。言わないでくれ……」

桃香が文句を言いたくなる気持ちも分かる……こんなのただの落書きだ……

……頭が痛くなってきた。

「腕が六本もありますわよ？」

「指が十本も……」

「角が生えてる……」

「尻尾まで……」

「あわわ！目が四つもありましゅ！」
「はわわ！口が裂けてましゅ！」
「何でも各地の情報を統合したらこうなったらしい……」
天和達が可哀想になってきた……
「一っち、これいくら何でも無理あるで……」
「つまり……あれだ……頑張って探せ……」
「「「……」」」
「すまないとは思っている……
そんなことよりどうやって攻めるか軍議をするぞ」
「「「（逃げた……）」」」
逃げて無いぞ？
きりが無いと思ったから話題を変えただけだ。

そして、軍議が終わり。

「以上で軍議終了だ」

俺がそう言うと全員が立って各々の陣に戻って行く。
すると、華琳だけが俺の所に来る。

「何だ？曹操殿」
「ちょっと、二人だけで話せないかしら？」
「華琳様！この男と二人きりなど！」
「春蘭、私の言うことが聞けないかしら？」
「しかし！」
「春蘭」
「……はい」
春蘭は渋々下がった。
「良いだろう。白！」
「ここに……」
「陣に戻るのが遅れると詠達に伝えろ」
「御意」
白はそう言って天幕から出て行く。
「華琳様何かあったらお呼びください」
「貴様！華琳様に何かしたら殺すぞ！」

「華琳様に何かしたら許さないわよ！」
三人はそう言って出て行く。
三人の気配が消えたのを確認すると華琳は俺の近くの席に座る。
「単刀直入に聞くわ。あなた、私の元に来ない？」
相変わらず使えそうな奴はスカウトするんだな。
「いや、残念だがな」
「そう……」
華琳は少し残念そうな顔をする。
だが、すぐに顔を元に戻す。
「で？二人になった理由はそれだけじゃないだろう？」
「え？」
「それだけだったら二人になる必要なんて無いだろう？」
「ええ、でも、言いにくいことなのよ。
それにあなたが信じるとは思えないし……」
まさか、華琳は……
「俺のことを思い出したのか？」

「！」

「その表情はそうなのか？」

「……ええ」

俺は言葉を失った。
華琳までが思い出すなんて
全然思いもしなかった……

「曹操……いや、華琳。久しぶりだな」

「ええ……一刀」

華琳はそう言って俺に抱きついた。

「一刀……愛してる」

「俺もだよ……」

しばらく抱きあった後俺達は自分達の陣に戻った。
戻った後詠達に遅いと怒られたのは言うまでも無い……

十七話　一刀の強さ（前書き）

こんにちわ～
久々の前書きでお知らせで～す。
実は『三人の天の御遣い』を一度打ち切りにして
設定はそのままで文章を大幅に変える『三人の天の御遣い・改』を
只今書くことを決定しました！
いえぇーーーい！
いつから書くかは決定していませんがよろしくお願いします！
では、今はこっちを始めま～す。

十七話　一刀の強さ

今俺達董卓軍は黄巾党の拠点に向かっている。
一応言っておくと龍三人は龍の姿をとらせた。
俺が本物の龍帝と各諸侯に示す為だ。

『陛下、今回は殺しても構わないのですか？』

「構わん、劉弁の勅命は『黄巾党を滅ぼせ』とある。
それに、民の生活を守る為には犠牲が必要だ。
その証拠に人間は生きる為に生き物を犠牲にするからな」

『御意』

その質問から緑は俺に何も聞かなかった。
そして……

「一刀！行くわよ！」

「ああ！」

俺は龍三人に振り向く。

「白！黒！緑！黄巾党を滅ぼせ！」

『『『御意！』』』

龍三人はそう返事し黄巾党の本拠地に飛んだ。
そして……

『龍だ！逃げろ！』
『何でこんな所に龍が居るんだよ！？』
『知るか！逃げろ！逃げろーーーー！』
『助けてくれ！もう悪さはしねぇよ！』

黄巾党達は叫びながら逃げ惑っている。
俺はやるべきことをやる。
そう……

天和達を見つけ仲間にするということを……

森

第三者視点

森を走っているのは黄巾党の頭領の三姉妹。
「何なのよ！相手が龍を使うなんて聞いて無いわよ！」
文句を言うのは三人の中で真ん中の地和。
「地和姉さん、文句言って無いで歩いて」

冷静に言うのは一番下の人和。

「龍さんって口から炎吐けるのかな？」

天然なことを言うのは一番上の天和。

三人は攻めてきた龍を見てすぐに逃げたのだ。

「人和、次はどこに行くの？」

「洛陽辺りかしら。あそこには信者が多いから」

「お！田舎から一気に大都会だねぇ」

そんなことを喋っていると

「張角、張宝、張梁だな？」

「誰！？」

後に居たのは漆黒の衣を身に纏った死神だった。

その姿を見た瞬間三人は死を覚悟しただろう。

だが、漆黒の死神は手に持っていた刀を鞘にしまった。

「何のつもり？」

「お前達は殺さない。

各地の黄巾党も俺の龍を使えば簡単に

消すことが出来る」

「まさか、龍帝？」

「そうだ」

「その龍帝がどうして私達を生かすの？」

「勅命だからだ。『黄巾党の頭領は一番に見つけた者の好きにせよ』
そう言う
勅命が出ている」

人和は唾を飲み込んだ。
自分達はどうなるのか想像が出来てしまったからだ。
人和は意を決して聞いた。

「私達をどうするの？」

「洛陽まで来てもらう」

「え？」

「何だ、慰み者になる想像でもしてたか？」

「ええ」

死神はそれを聞いて苦笑する。

「それも、当たり前だな。
そろそろ、俺の臣下が……」

『一刀様！』

そんな声が聞こえて四人が上を向くとそこには白い龍が居た。

「白か、丁度良いところに来た。
詠達は何をしている？」

『張角達を探しています』

「張角達を見つけた」

『おお！流石です！』

「詠達の所まで行くぞ」

『御意！』

白い龍は出来る限り下に降りる。

『これが限界です』

「構わない。三人共一瞬怖いが度胸試と思っていればすぐに終わるぞ」

「「「え？」」」

一刀は人和と地和に近づき二人を掴む。

「な、何をするの？」

「まさか……」

「安心しろ、白が絶対に掴んでくれる。
潰しはしないさ」
「ちょ、ま！」
一刀は人和の言葉を最後まで聞かず二人を上に投げる。
「「きゃーーーーー！」」
パシ！
「上手く取ったな。次は張角、お前だ」
「うん」
「怖くないのか？」
「怖いけど……
助けてくれるんでしょ？」
「ああ」
「なら良いよ」
天和は自分から一刀に近づく。
「何を言っても無駄だな……」
一刀はそう言って天和を掴み一気に飛ばした。

「良し、上手い取ったか。
俺も跳ぶかな」
一刀はそう言って足に力を込めて一気に白の所まで跳ぶ。
白の上
一刀ｓｉｄｅ
「何だ、二人は気絶したのか」
人和と地和は泡を吹いて気絶してしまっていた。
「旅芸人とは思えない顔だな……」
「ふふっ、そうだね」
「お前は気絶しなかったんだな」
「信じてたから」
「そう言われると照れるんだが……」
全く、天和は変わらないんだな……
「ふふっ、可愛い～♪」
「……」

「あれ？すねた？」

「いや、何でも無い」

男が可愛いって言われて喜ぶと思ったのかよ……

「白、早く詠達の所に行け」

『御意』

その後俺達は天和達を詠達を見つけて天和達の自己紹介を終わらせ戦を終わらせて洛陽へと帰った。

十七話　一刀の強さ（後書き）

８／２２
すいませんでした。
間違えて書いていたのを忘れていました。
今日修正しました。
あと、明日から諸事情で
更新出来ません。
今日、更新できなくてごめんなさい……
では、また次回。

拠点話　月&劉協&黒

「へう……」

「むむむ～」

「「「えへへ～♪分からないでしょ～♪」」」

月と劉協が何をしているかと言うと黒の能力が関係している。
因みに黒の「」が三つなのも関係している。
黒が支配しているのは闇。
黒はその闇を使い実態の無い身体を創ることが出来る。
その身体はそうとうそっくりで声も同じらしい。
今は黒と劉協が実態のある黒を当てる遊びをしている。
だが、一回も当てられて無い。
それほどそっくりなんだ。

「また勘でやってやる！右！」

「真中だと思います」

「ぶっぶ～！正解は左でした～♪」

黒はそう言って実態の無い身体を消す。

「う～また負けた～！」

「へう……」

「あははは～♪一刀様も分からないでしょ～♪」
黒はそう言いながら俺に振り向く。
「いや、分かった。やってみろ」
「ふふふ～♪言ったね～？絶対勝つから～」
黒がそう言うと闇が黒に集まる。
これは黒が実態の無い身体を創る時の段階らしい。
そして、その闇が別れる。
「「「さぁ～ど～れだ？」
「ふむ……右だ」
「「「何で分かったの！？」」」
黒は驚きながら実態の無い身体を消す。
「闇が別れる時の闇の濃さだな。
本物は少し濃い」
「気付いてたんだ……はぁ」
「と、言ってもほんの少しだがな。
常人には分からないだろう」
俺がそう言うと黒は笑顔になる。

「そうだよね！滅多には気付かれないよね！」

「あ、ああ」

そこまで元気にならなくても良いだろうに……

「ネタが分かったからもう分かるようになったもん！
もう一回！」

「へう、よろしくお願いします」

「あはは～♪分かるかな～？」

またやるのかよ……
めんどくさい奴等だな……

「俺は自分の部屋に戻ってるぞ」

俺はそう言って自分の部屋に向かって歩く。
その後、劉協から聞いたが一度も分からなかったらしい。

十八話　最悪なシナリオの始まり

「……と…ま……かず…さま……かずとさま！……一刀様！起きてください！一刀様！」

ん？白か？
もう朝か……

「一刀様、おはようございます」

「ああ、白、どうした？」

俺は身体を起こしながら質問する。

「はい、そろそろ軍議が始まりますので」

「そうか、分かった。
着替えるから外に出てろ」

「御意」

白は顔を赤くしながら部屋の外に出て行った。
……俺は何か不味いこと言ったか？
そんなことを思いながら俺は寝巻を脱いで依頼実行の際に着る服装に着替える。

「少し感傷的になってしまうな……」

始めて人を殺したのは五歳の頃だったか……

「おっと！もう着替えは終わったか」
俺は扉を開く。
「行くぞ、白」
「はい」
俺達は歩きながら雑談をする。
「そう言えば黒や緑はどうした？」
「二人は先に行っています。
これから私達三人が一刀様を起こしますので」
「分かった。黒には静かに起こすように言っておいてくれ」
「くすくす、分かりました」
そんな雑談をしていると玉座の間の扉に着く。
俺達が着いたのを見た侍女は玉座の間の扉を開く。
そして、俺達は玉座の間に入る。
玉座に月は座っていなかった。
「おい詠、月はどうした？」
「分からないわ。
ボクだって分からないことはあるもの」

それもそうだな。
ん？皆以外の気配がするな。
まさか、敵か！？

「誰だ！柱の後に居るのは！」

「「「！」」」

俺がそう言うと皆自分の得物を構える。
俺も龍帝刀を抜く。
すると、白装束の男が出てくる。

「誰だ！？」

「我のことなど気にするな。
それより董卓がどこに居るか気にならないか？」

「！月に何をした！？」

「まだ何もしていない。
城の中には居ないがな」

「何が欲しい？」

「しばらくしたら各地方の有力諸侯が攻めてくる。
それらと逃げずに戦うことだ。
それに皇族二人の権力は使わせん」

反董卓連合か……！
それに二人の権力も封じられるとは……

「分かった。
だが、こちらがとる作戦については文句は言わせんぞ」

「良かろう」

「全員軍議を開くぞ。詠、早く席につけ」

「え、ええ」

全員が席につき軍議が始まる。

「詠、策については俺に任せてくれ。
今のお前は少し冷静を欠いている」

「分かったわよ……」

詠は頷くと俯いてしまった。

「はっきり言っておくがそんなに策は要らん。
泥水関には俺と黒と緑と白と華雄。
虎牢関には恋と。
ここには霞が皇族二人の警護だ」

「どうやって戦うのですか？」

「基本的には籠城戦だ。
泥水関と虎牢関の防御力は極端に高いからな」

「賛成よ。

でも何で虎牢関には武将が恋しか居ないの？」
「危なくなったら俺達はすぐに虎牢関に退くからだ。
華雄は俺の指示にちゃんと従えよ」
危なくなっても退かないとか言われたら華雄は絶対死ぬからな。
「分かっている！」
安心出来ないな……
「籠城戦で大した策は要らんだろう。
必要なのは実力と戦う意思だ。
全員頑張れよ」
「「「おう（御意）（は～い♪）！」」」
軍議が終わり全員が立って自分達の配置に着こうと
玉座の間を出て行こうとする。
俺は龍三人を呼びとめる。
「白、黒、緑」
「何でしょう？」
「何？」
「何ですか？」
俺は小声で命令する。
「お前等に命令することがある。

しっかり聞け」

「「「御意」」」

三人も小声で返事した。

月を誘拐した報いは受けてもらうぞ。

時は戻り袁紹の領地

第三者ｓｉｄｅ

「麗羽様、麗羽様に謁見したいと言う者が」

麗羽とは袁紹の真名である。

袁紹に話しかけたのは袁紹の片腕の顔良だ。

「どなたですの？」

玉座に座っているのは袁紹。

字を本初。

彼女は自分の地位を振りかざしていた。

「洛陽から来た民と」

「返しなさい」

「は？」

「ただの民が私に謁見など聞いて呆れますわ」
袁紹がそう言っても顔良は食い下がる。
「ですが、その者は傷だらけでどうしても伝えたいことがあると」
「！何ですって！？すぐに通しなさい！」
「分かりました。通してください！」
顔良がそう言うと玉座の間の扉が開かれる。
すると一人の男が玉座の間に入る。
「謁見を許可して頂き感謝します」
「本当に傷だらけですわね。
どうしましたの？」
「洛陽で圧政が行われ私はそのことに耐えられず助けを求めに来たのです。
大陸一の命家である袁家の当主の袁本初様に！」
「！おーほっほっほっほ！分かりましたわ！
圧政を行っている洛陽に攻め入りますわ！
顔良さん！各地方の有力諸侯に洛陽を攻めるという遣いを出しなさい！」
「御意！」

袁紹は男に優しく語りかける。

「少しお休みなさい。
洛陽は私が救いますわ」

「ありがとうございます」

「その方を医者に見せなさい！」

袁紹がそう言うと侍女はその男を支え玉座の間から出る。
出る時にその男が怪しく微笑んだのは誰も気が付かなかった。

十九話　泥水関での戦い（前篇）

「おーっほっほっほっほ！」

高笑いをしているのはこのは反董卓連合を結成させる為に
各地方の有力諸侯を集めた袁紹である。

「皆さん、私は先程から言ってますのよ？
この反董卓連合には総大将が必要ですの」

さっきからこれである。
これで三十回目。
聞いている者達はもう呆れ顔だ。
そんな中痺れを切らした劉備が立つ。

「袁紹さん！早く攻めないと董卓さんが守備を完璧にしちゃいますよ！」

「あら？なら劉備さん。
あなたはこの反董卓連合軍で総大将をするべきなのは
誰だと思いますの？」

「もう袁紹さんで良いんじゃないですか？
何だか袁紹さん総大将をやりたそうだし」

「別にやりたい訳ではありませんけども引き受けましょう！」

他の諸侯の意見は聞かず袁紹は話を進める。

「さて、劉備さん？
総大将として命じますわ。
あなた先陣を務めなさい」

「え！？」

袁紹は元々自分を推薦した者に先陣をさせる気だったのだ。
それに気付かず劉備は袁紹を推薦してしまった。

「私は総大将でしてよ？
何か文句がございますの？」

「うっ、ありません」

「なら決定ですわ。
頑張りなさい！」

軍議が終わり。

劉備の陣

「う～大丈夫かなぁ……」

「はわわ、大丈夫でしゅ！
頑張って兵と兵糧を貸してもらえましたから」

「うん……」

いくら諸葛亮が言っても劉備の不安は消えない。
そこに二人の女性が現れる。

「元気〜〜？」

「雪蓮……」

「貴様！何者だ！」

関羽は堰月刀を構える。
それを見た劉備はそれを慌てて止める。

「愛紗ちゃん！その人は孫策さんだよ！」

それを聞いた関羽は堰月刀を降ろす。
それを見た劉備は頭を下げた。

「愛紗ちゃんがごめんなさい。
ところで、孫策さんはどうしたんですか？」

「ちょっと、協力しようかなって」

それを聞いた劉備は首を傾げる。

「協力ですか？」

「ええ、あなた達だけじゃ先陣なんて無理でしょ？
だから協力してあげるの」

劉備は少し考えて訪ねた。

「私達はあなた達を完全には信用出来ません」

「信用にたる証拠を見せろってことね」

「はい」

「良いわ。冥琳」

「うむ、今から私が考えた策で泥水関を攻める。
こちらに相当危険がある上に手柄は全てそちらに
渡そう」

「え？良いんですか？」

劉備がそう聞くと孫策は頷く。

「ええ、だから信用出来たら虎牢関を攻める時も一緒に
攻めましょう」

劉備は諸葛亮を見た。
諸葛亮は頷いた。
構わないと言っているのだろう。

「分かりました！協力しましょう！
信頼の証に私の真名を預けます。
私の真名は桃香です」

「ありがとう、桃香。

私の真名は雪蓮よ」

二人は堅く握手を交わす。
その後両者の武将や軍師も真名を交換した。
だが、この時ここに居た者達は知らなかった。
反董卓連合軍は虎牢関どころか泥水関も破れないと言うことを……

二十話　泥水関での戦い（中編）

「ここまで反董卓連合軍が集まっていると壮観だな。」
俺は今泥水関の城門に立っている。
目の前に広がるのは反董卓連合軍の兵士達。
「白、参加しているのは誰だ？」
「はっ！主な諸侯は袁紹、袁術、曹操、孫策、劉備ですね。
それ以外には巧みに馬術を操る馬族ですね」
ああ、翠も居るんだったな。
だが、籠城戦だから馬術は関係無いな。
そう言えば馬術では白蓮もすごいだろうに……憐れだ……
「一刀、敵はどう出る？」
「ふむ、敵は俺達を引きずり出す為に華雄の武を
侮辱するだろう」
「ふっ、その程度で私が出る訳なかろう」
別の世界ではお前はその程度で出てるんだよ……
「そして、一気にこっちに向かって突入って感じだ」
「うむ、私が出なければ良いのだな？
分かった」

絶対お前は出ようとするって……
はぁ……不安だ……

「む？一刀、誰か来たぞ」

「む？」

華雄が指した方を見ると確かに居た。

「雪蓮か……」

俺が誰にも聞こえないようにそう呟くと雪蓮は叫ぶ。

「暴政を働いている愚かな者の駒達よ！
貴様等が出てくるが良い！
もし貴様等が我等を恐れず戦う勇気があるのなら！」

そう言えば雪蓮は様々な世界で挑発役だったな。

「ああ、貴様等にそんな勇気がある訳が無いか。
貴様等は暴政を働いている者の駒なのだからそんな武も勇気も無いな！」

ブチンッ！

ん？今何か切れたような音が……

「孫策め！良くも我が武を！
その上董卓様を侮辱するとは許せん！

私は出る！」

さっきまで出ないと言ってた奴が一時間も経たずに出るとか言うなよ……

別の世界でどんなやり取りがあったか分かるな……

「華雄、落ち着け」

「貴様！董卓様を侮辱されて黙っていろと『二度目は無いぞ？』っ！」

華雄は俺の声に覇気が含まれているのに気が付いたのか黙る。

「俺もキレてるんだ。

だが、月を守りたいならここはお前は出るな。

俺がお前の屈辱をはらす」

「……どうするのだ？」

「ちょっとな」

俺はそう言いながら城壁の端に立つ。

雪蓮ｓｉｄｅ

「これで出てくるわね」

私が挑発すれば華雄は出てくる。

それに合わせ劉備達と協力し華雄を討取って
泥水関を攻略する。
それが私達の策だ。

「しっかし遅いわね～
早く出てくると思ったけど……」

そんなことを呟いていると城壁の端に一人の少年が立つ。
私はその少年に見覚えがあった。

「龍帝！？」

私は驚いた顔をした。
まさか龍帝が董卓に味方しているとは思っていなかったからだ。
龍帝はこう叫んだ。

「孫伯符！貴様そこまで落ちたか！
相手の武を侮辱し更にはその相手の主人を侮辱するとは
貴様は武人として何も感じぬのか！？
答えよ！孫伯符！」

「っ！」

そのは覇気に思わず屈しそうになる。
だが、私は負けられない。
私は必死に覇気に耐えてこう叫んだ。

「洛陽で圧政をし民を苦しめている者を侮辱して
何が悪い！」

「董卓が暴政をしているだと？
ふざけるな！貴様は董卓を見たことがあるのか！
洛陽に来たことがあるのか！
董卓は暴政などしていない！
貴様等はただ自分の名を上げたいが為にここに攻め込んできた屑だ！」

そんなこと信じられる訳が無い。
だが、龍帝は続けた。

「本来なら貴様等は我が家臣が貴様等の相手をする所だが
貴様等の行いは断じて許さぬ！
貴様等に我と闘う勇気があるならば待っていろ！
我が貴様等を殺してやる！」

龍帝はそう叫んで後に下がった。
私は嫌な予感がしてなら無かった。

一刀ｓｉｄｅ

「一刀様、董卓が暴政を行っていないと言って良かったのですか？」

「ああ、奴等は策には文句を言わないと言ったからな。
ところで……」

「はい？」

「何故華雄は気絶している？」

華雄は白眼をむいて気絶していた。

泡まで吹いてるし……

「一刀様の覇気に当てられ気絶しました。
私も危なかったです」

それなりには抑えたつもりだったが……

「悪かったな」

「いえ」

「それだけだ。
行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

俺はその返事を聞いて城壁の端に行く。
そして、そこから跳んだ。
降りた場所の前には孫策が立っていた。

「ふっ、退かなかったか。
なかなか勇気があるじゃないか」

「だって、面白そうじゃない。
龍帝よ？龍の皇帝よ？
どれ程の強さか気になるじゃない？」

流石雪蓮だな。
強そうな奴と闘いたいと言う願望が半端無いな。

「良いだろう。ならば、俺の本気を見せてやる」

「ふふっ、来なさい！」

第三者視点

孫策は南海覇王を構え一刀の様子を見る。

「（あれだけの覇気を持っているならそれなりの実力者の筈。なるべく早く片付けた方が良いわね……）」

そんなことを思っていると一刀は龍帝刀を抜く。

「随分細い剣ね。
多分それ折れるわよ？」

「なら試してやるよ。
どっちが折れるかってのをな」

「やってみなさいよ」

「後悔するなよ」

一刀はそう言うと孫策に襲いかかる。

「（私よりも早い！）」

一刀は龍帝刀が届く距離までいくと龍帝刀を振う。

孫策はとっさに南海覇王で防御するが衝撃を殺しきれず後に下がる。
「っ！あなた早いわね」
「この剣は速さで敵を斬る剣だからな。
それより見ろよ自分の剣を」
「え？あ！」
孫策が南海覇王を見ると斬られたところから上が無くなっていた。
孫策は周りを見渡す。
「探し物はこれか？」
「え？」
一刀は左手に南海覇王の刃を持っていた。
「斬った時に少しな。
どうする？これであんたは戦えないぜ」
「戦っているのは私一人では無いわよ」
「ああ、知ってる……ぜ！」
一刀はその場で回転斬りをする。
「っ！」
「きゃうっ！」

後には呉の隠密の甘寧と周泰が居た。
「お前等がいつから隠密をしていたか知らんが俺は五歳の頃から隠密をしていた。
お前等では俺には勝てん」
「「っ！」」
二人気付いてしまった。
この男には絶対に敵わないということに……
すると一刀は露骨に嫌そうな顔をした。
「やれやれ……まだ来るのか……」
一刀の視線の先には曹孟徳の両腕の夏候姉妹。
そして、大徳劉玄徳の義姉妹の関羽と張飛が居た。
「龍帝北郷一刀。
我等の主から『知ってる』え？」
「どうせあいつのことだから俺を捕まえろって命令を出したんだろう？」
夏候淵は一瞬驚いた顔をしたがすぐに顔を元に戻す。
「我が主を知っているのか？」
「ああ、真名も許されている」
「「！」」

夏候姉妹は固まってしまった。
まさか、自分の主が男に真名を許しているとは思っていなかったのだ。
一刀は張飛と関羽と趙雲の方を向く。
一刀はわざと三人を知らない様な口調で聞く。

「貴様等は？」

「鈴々は張飛なのだ！」

「我が名は趙子龍だ」

「我が名は関羽」

「ほう、ならば貴様等に問う。
何故ここに来た？」

一刀がそう聞くと三人は即答する。

「悪さをしている董卓を倒しに来たのだ！」

「暴政を働いている者を打倒しに来た」

「二人の言う通りだ。
洛陽で苦しんでいる民の為に我等は立った」

「先程我は董卓は暴政を働いていないと言わなかったか？」

「そんなことは信じられないのだ！」

「ならば、張飛よ
何故我が立ったと思う？
龍帝である我が暴政を働いている董卓を
助ける理由はどこにあると思う？」

「分からないのだ……」

一刀は冷静を装っていたが内心は怒っていた。
何も知らずに董卓を悪と言う反董卓連合軍に
そして、かつて別の世界で何も知らずに洛陽に攻め込んだ自分に……

「簡単だ。
暴政を働いていないのに攻め込まれている董卓を
守るためだ。
董卓が暴政を働いているならば我はここに立っていない。
それどころか董卓を斬り捨てているだろう。
だが、我は貴様等から董卓を守る為にここに居る。
どう言う意味か分かるな？」

「……本当に董卓は暴政を働いていないのか？」

「愚問だな。
それと言っておくが貴様等は退かない方が良いぞ」

「何？」

「今貴様等が退いたら殆んどの諸侯を敵に回すことになるぞ。
どうせ総大将は袁家の人間だろう？」

「ああ、袁紹だ」
「仮にも袁家は名家だ。
お前等が退けばお前の主は苦しい思いをすることになる」
「っ！」
「分かったら俺と戦え。
俺が勝っても殺しはしない」
「……分かった」
関羽は渋々ながら了承し堰月刀を構える。
「関雲長、参る！」
「来い！」
軍神の如くの関羽の堰月刀が一刀を襲う。
だが、一刀は冷静に全てをかわしていく。
「貴様何故攻めてこないのだ？」
「俺の勝手だろうが」
一刀が攻めていないのには理由があった。
それは時間を稼ぐ為だ。
董卓を助けるために一刀が練った作戦には時間が必要だった。
その為一刀は関羽に攻撃をしていない。
孫策の剣を折ったのは自分に戦う意思があるという意思表示だ。

まさか孫策の剣を折った者に戦う意思が無いなどとは誰も思わない。
一般兵が見れば一刀はかわすしか手が無いだけと思われ
そこそこの物が見れば様子を見ていると思われる。
その為一刀はかわし続けている。

「（俺が白達に提示した策が成功するのにかかる時間は大体三時間程だな。
恐らくそろそろだと思うが……何かあったのか？）」

「く！何故当たらないのだ！」

関羽は焦りから少しづつ攻撃が荒くなっていく。

「（愛紗の攻撃が荒くなったか。
倒さないと不自然に思われるな……）」

一刀は右手で関羽の堰月刀を掴む。

「な！？」

そして、左手で関羽の鳩尾に正拳をくらわせる。

「ぐっ！」

関羽はそのまま気絶する。

「ただ、かわされ続けただけで集中を切らすからこうなる」

一刀がそう言った瞬間張飛が襲いかかってくる。

「よくも愛紗を殴ったなーー！」
張飛はそう言いながら斬りかかって来る。
「成程、関羽と同等の実力か……」
一刀は張飛の攻撃をかわしバックステップし距離をとる。
そして、こう言った。
「張飛、お前一人では我には勝てん。
趙子龍よお前も来い。
趙子龍だけでは無い。
ここに居る者達全員かかって来い」
「何だとーー！？お前なんか鈴々だけで十分なのだ！」
「はぁ……」
「（しょうがない……格の違いと言う奴を教えてやるか）」
一刀はそう考え自分の中の『死神』を起こす。
「いい加減格の差を弁えろ。
お前だけじゃ俺に勝てる訳無いんだぞ。
俺はお前に勝つ可能性を与えてやったんだぞ」
「っ！」
その場に居た全員気付いてしまった。
この男には一人で太刀打ち出来ない。

「分かった」

「星！？何を言うのだ！？」

「この者には一人では勝てまい。
ここに居る者達全員でかからなければ死ぬのは
我等だ」

「そうだな、姉者」

「……仕方無いな……」

「……明命」

「……はい」

「話は終わったな。
かかってこい」

「（月を助けるまで俺は倒れ無い！）」

龍帝対三国の武将の対決が今始まる！

二十一話　泥水関での戦い（後編）

ガキンッ！ガンッ！キンッ！

鳴り響く剣戟。

その剣戟は三国の武将と一刀が戦っている音だ。

「くっ！これだけ揃って傷の一つも付けられないとは……！」

三国の将達の状態は疲労困憊。

もはや各々の得物を振うのがやっとの状態。

それに対して一刀は余裕の表情。

一刀にとってこれは『普通』のこと。

一刀は元の世界では四方から飛んでくる銃弾をかわしながら敵を骸にしていたのだ。

これ位のことは大したことではない。

「（こっちはいくらでも時間を稼いでやる。

頼むぞ！黒！緑！）」

一刀はが心の中で黒と緑に頼んでいる時、一刀は気が付いていなかった。

泥水関から夏候惇に狙いをつけた弓兵が居たことに。

その弓兵はゆっくりと狙いをつける。

その時ようやく一刀も気付いた。

「（何だ？この殺気は？春蘭に向けられている？）」

一刀はゆっくりと後を向く。

すると泥水関の扉が少し開いていて弓兵が春蘭を狙っているのに気付く。

「（不味い！どうする？どうすれば良い！？）」

一刀は考え一つの答えに至った。

「（これで良い。月や劉協達は怒るかもしれないがこれが俺の答えだ！）」

一刀は覚悟を決める。

「（始めるのは奴が矢を放ってからだ。
集中しろ……冷静になれ……）」

一刀は集中を始める。
そして、少し経ち夏候惇を狙っていた兵は矢を放つ。
それと同時に一刀は夏候惇に向かって走る。
春蘭は警戒して七星餓狼を構える。
そして、一刀は龍帝刀を振う。

ガキンッ！

「そのままにしていろ」

「何？」

夏候惇はどう言う意味か分からなかったがすぐに分かった。

ザシュッ！

「ぐっ！」

一刀は飛んできた矢に当たり痛みで声を出す。
夏候惇は何が起こったのか分からず呆然としている。

「何故？」

「曹操の……いや、華琳の悲しむ顔は見たくないからな」

「！貴様……華琳様のことを……」

「ああ、そうだ愛している。
だが、いくら華琳の臣下とは言えここは通さん。
通したければ俺を殺してからにしろ」

一刀は肩に刺さった矢を抜き放り捨てる。

「聞くが良い！反董卓連合軍よ！
我は貴様等がいくら我が身を切り刻んだとしても！
いくら矢を当てたとしても！
我が友董卓を守る為にここは通さん！
通りたければ我が身をこの世から消し去れ！
だが！我はただで消える事は無い！
この身が消し去れる前に一人でも多く道連れにしてやる！
さあ！来るが良い！反董卓連合軍よ！」

一刀がそう叫んだ瞬間空から大きな影が飛んでくる。
その影は龍。
その龍は神々しさを纏い現れた。

「お前は……いや、あなた様は！」

『若き人間の龍帝よ、安心するが良い。
汝の良き友は汝の臣下によって救われた。
もう戦う必要は無くなったぞ』

「はっ！分かりました！ところで聞いてもよろしいでしょうか？」

『何でも聞くが良い』

「あなたは初代龍帝様ですね？

『左様。時に汝の臣下はあの者か？』

初代龍帝は白を指して言う。

「はい、他の二人は我が友を助けに行かせましたので
今ここに居るのは白のみです」

『そうか……白よ』

「は、はい！」

白は緊張しがちがちに固まっている。
初代龍帝は龍にとっては神のような者。
その神が話かけてくれば緊張もする。

『この者を支えよ。
この者は我を超える龍帝になる』

「は、はい！」

「初代様一体何故ここに居られるのですか？
黒と緑はどうしたのですか？」

『うむ、答えよう。
我がお主を見る為に洛陽に行った時に偶々
二人に会ったのだ。
その時二人には偶然会った』

時は戻り洛陽

黒と緑は洛陽で董卓を探していた。
そして、董卓が捕らえられている所を発見し突入しようとしていたのだ。

「数は大体十人位だね」

「楽勝でいけるな。まずは私が突入し敵を倒す。
お前は董卓殿を救え」

「うん。じゃぁ……行くよ！」

黒の合図と共に二人は走り建物の中に入る。
そして、入口の近くに居た男を殴る。

「ごぶ！」

「月ちゃんを返してもらうよ！」

「黒の言う通りだ！」

そう言った時には既に二人は囲まれていた。

「行くよ！緑！」

「遅れるなよ！黒！」

「ふう……終わったね」

「うむ、まさかここを探し当てるまでにここまで時間がかかるとは思わなかったが……私は董卓殿を城に運ぼう。黒は陛下に『その必要は無い』誰だ！」

黒と緑は戦闘態勢に入る。

だが、声をかけた者の姿を見た瞬間二人は驚いた顔をした。

その者は人間の姿をとった初代龍帝だったのだ。

「流石は上級の龍だ。我が初代龍帝と気付くか」

「お褒め頂き光栄です。
ですが、我が主に知らせなくてもよいと言うのは何故です？」

「私が伝えるからだ」

「初代様が！？」

「うむ、見てみたいのだ。
どの様な人間が龍帝になるのかを」

それを聞いた二人はお互いの顔を見て
初代龍帝に頭を下げこう言った。

「「一刀様（陛下）をよろしくお願いします」」

二十二話　反董卓連合洛陽へ

初代様が現れて俺に月の安心を教えた後俺は白を龍にさせて
全力の覇気で反董卓連合軍の兵士を脅し陣に戻らせた。
そしてその後各諸侯の代表者達と話す為に俺は白と初代様を連れて
軍議用の天幕に来た。
そして、月が攫われ戦えと脅されたことを話した。
そこで袁紹が洛陽の民と名乗る人間に月が暴政を働いていると言われたという事実を知り
俺は独断で反董卓連合の代表者数名を洛陽に連れていくことを決めた。
華雄は最後まで反対していたが『月の為だ』と言ったら承諾してくれた。
虎牢関に居た恋は『一刀がそう言うなら良い』と言ってくれた。
そして、俺達は洛陽の街の前に居る。

「もう一度言っておく。
洛陽の中で武器を抜くことは禁止だ。
抜いた場合は覚悟してもらう。
良いな？」

全員が頷く。
俺はそれを見て全員を洛陽に入れていく。
そして、全員入ったのを見て俺も入る。

「これは……」

袁紹は呆然とした表情で呟く。

「洛陽の状態だ」

諸侯の代表者全員が呆然としている。
それもそうだろう。
そこに想像していた暴政の傷は無く
あったのは民の笑顔だったのだから。

「俺はこれを守る為にお前達と戦ったんだ。
ついて来い董卓に会わせてやる」

俺は各諸侯の代表を連れて城へと連れていく。
月の誤解を解く為に……

洛陽の城の玉座の間

「一刀さん！大丈夫でしたか！？」

「一刀！大丈夫か！？」

「一刀！」

玉座の間に入ると月と劉弁それに劉協が俺に飛びかかって来る。

「っ！大丈夫だ。問題無い」

一瞬痛かったがそこは男の誇りで何とか耐えた。
華琳が殺気を含めた視線を送っているがそれも耐える。

「一刀さん、すいませんでした……
私が捕まったから一刀さんが危ない目に……」

「気にするな。
お前が無事で良かったよ」

「一刀さん……」

「月……」

だんだん良い雰囲気に……

「こほん！」

俺達はその咳払いで離れる。
華琳、助かった。
お前が止めてくれなかったら俺は色々危ないことをしてたよ……

「りゅ……皇帝殿、あなたは袁紹をどうしますか？」

俺の意図を察したのか劉弁は敬語で返す。

「どう言う意味ですか？龍帝殿」

「彼女は偽の情報に騙されたとは言えあなたの友を
攻めました。
その結果この街の民は危険に巻き込まれました。
何か罰を与えるべきかと……」

俺がそう言うと袁紹は顔を青くする。

「あなたの理屈ならば他の者も罰する必要があるかと思うのですが？」

「いえ、袁家は仮にも名家です。
その名家が集まれと言って逆らった者達は袁家の敵になるようなものです。
集まった者達はそれを恐れた……
そんな者達には罪は無いでしょう」

「ふむ、龍帝殿には何か案は？」

「官位を剥奪し董卓の下に降らせると言うのはいかがでしょう？」

俺がそう言うと袁紹は俺に向かって文句を言い始める。

「何故私が董卓さんなんかの下に入らなければいけないんですの！？」

「うるさい！黙れ！お前に拒否権は無い！」

「ひっ！」

この世界の女は怖いな……

……すまん、こっちを睨まないでくれ劉弁……

「分かったか！？」

「はい！分かりました！」

劉弁おｓ……
すいませんでした！
……はっ！思わず別の世界の俺になってしまった……

「では、袁紹は董卓の下に入ることで頼むぞ、月」

「は、はい！」

「龍帝殿、何か言いたいことはありませんか？」

「劉備に二つ」

「わ、私ですか？」

桃香はゆっくりと前に出てくる。

「お前はどんな世界を創りたい？」

「え、えっと……
この大陸の皆が笑顔で暮らしていける世界を創りたいです」

「成程……だが、お前は『分かってます』何？」

「分かってます。私が理想と矛盾していることをしてるって……
でも、私はその矛盾を背負って生きていきます」

「その理想を叶えるには力が必要だ。
お前達は今回の件で名を上げて力を得る筈だった。
だが、今回の件で力を得ることは無理になった。
そこで質問だ。

お前等はこれからどうするんだ？」

「……」

答えを出すのは無理か……

なら、一つ道を与えてやるか……

「劉備よ」

「は、はい」

「董卓の下に降ったらどうだ？」

二十三話　初代との会話（前書き）

こんにちわ～
多分今まで分からなかったと思いますが初代様と緑は女です。
分かり難くて申し訳ありませんでした……
これからはこんなことが無いように気をつけます。
では、始まり～

二十三話　初代との会話

俺は今月に休暇を与えられ中庭で昼寝をしている。
月に隠していた傷がばれて絶対安静だと言われた。
そこまで重症では無いと言ったのだが……

『駄目です！ちゃんと休んでください！』

と、ものすごい覇気で言われた。
鍛練も禁止され龍帝刀は初代様が持っている。
何でも龍帝以外の者があれを扱うととんでもない災いがあるらしい。
その為初代様が持つことになった。
しかし……

「暇だ……」

そう、俺は今とてつもなく暇なのだ。
詠に仕事をやらなくて良いと言われた為仕事は何も無い。

「仕事がしたい……」

俺がそう呟くと後から誰かが近寄って来る気配がする。
この気配は……

「初代様、もうばれてます」

「む……ばれたか……」

初代様は子供の様に頬を膨らせた。

……少し可愛いと思ったのは秘密だ。

「初代様は何をしていらっしゃるのですか？」

「うむ、お前に話を聞こうと思ってな。
その前に……」

「何でしょう？」

「敬語はやめろ。
あと、私のことは香で良い」

「分かった。
これで良いか？香」

「うむ」

香は満足そうな顔をして頷いた。

「で？俺に聞きたいことって言うのは何だ？」

「うむ、何故劉備達にあんなことを言ったのかと思ってな」

「あれか……
俺も劉備達と同じ様な先を見ているからな」

俺はゆっくりと上体を起こす。
そして、あの時の劉備達の反応を思い出した。

まず最初に口を開いたのは愛紗だった。

「貴様！いくら龍帝とは言えその言葉は我等に対する侮辱だぞ！」

そう言った愛紗は怒りで顔を真っ赤にして今にも斬りかかってきそうな勢いだった。

白達は俺を守る様に俺の前に立っていた。

「関羽よ貴様は何の為に戦う？」

「桃香様の理想を叶える為だ！」

やはりな……

「劉備、お前は平和な世界を創る為なら王の座を捨てられるか？」

「はい」

即答か……流石大徳だな。

「関羽、お前は劉備が王であることにこだわり過ぎているんだ。

もしかしたらこの先劉備が王の座を捨てれば平和になる瞬間が来るかもしれない……
そんな時にはお前はどうするんだ？」

「っ！」

愛紗は何も言えずただ俺を睨んだ。
だが、その目に覇気は無くただ俺にとっては睨んでいるだけの目だった。

「劉備、即断しろとは言わない。
しばらく洛陽に留まり考えろ。
そうすれば道は開ける筈だ」

「……はい」

その返事を聞いた俺は玉座の間から出ていった。

「一刀よ、劉備はどう出ると思う？」

「さぁな、だが、彼女達が理想を大切にするなら降る筈だ。もし、降らずに敵になると言うのなら……」

俺は少し間を開けてこう言った。

「叩き潰すのみだ」

第三者視点

洛陽の宿

洛陽の宿で劉備達は話し合いをしていた。

劉備は真剣な顔でこう言った。

「皆は北郷さんの誘いはどう思う？」

劉備がそう言うと諸葛亮がおずおずと手を挙げる。

「北郷さんの誘いに乗った方が良いと思います」

「朱里！？」

関羽は驚いた顔をしている。

それでも諸葛亮は続けた。

「今回私達は理想を叶える名を上げようとしていました。
ですが、今回の一件では名を上げることは出来なくなりました。
それに私達は弱小勢力でしかありません。
このままでは群雄割拠になる時代を絶対に生き残れないでしょう。
ですから、桃香様の理想を叶える為に董卓さんに降った方が良いんです」

諸葛亮がそう言うとその場に重い沈黙が流れる。
それを破ったのは劉備だった。

「愛紗ちゃん、まだ反対？」

「……」

「北郷さんは私達の理想を叶える為の道を示してくれたんだよ？
弱小勢力の私達の為に……
それなのに反対するの？」

劉備の目にはいつも優しく笑う影は無く王として臣下に問う覇気があった。

「……桃香様、申し訳ありませんでした。
私は北郷殿の言う通り桃香様が王であることにこだわっていました。
ですが、そのこだわりは平和を創る邪魔になる……
私にもう否はありません」

関羽がそう言うと劉備は満足した顔で微笑んだ。

「じゃぁ、明日北郷さんに返事をしに行こうか！」

「「「はい！」」」

この時劉備はこう思っていた。

『北郷さん、ありがとうございます』

と……

二十三話　初代との会話（後書き）

まず皆さん個人的な場に後書きを使うことをお許しください。
柾棟さんコメントの返事で嘘をついてごめんなさい……
返信で初代龍帝の名前を出すと言ったのに出せませんでした……
これからこう言うことはしないようにしますのでこれから応援よろしくお願いします。
それと皆さん、個人的な理由で後書きを使って申し訳ありませんでした。
これから頑張ります。
では、また次回です。

二十四話　劉備と董卓

今俺は月に呼ばれ玉座の間に居る。
何でも俺の質問の返答をしに来たらしい。
それで劉備達が居るのは問題無い。
こちらのメンバーも揃っている。
劉弁と劉協が俺の膝の上に乗っていて董卓軍の面子が睨んできているが
そこはまだ許容範囲内だ。
だが、問題は……

「何故孫策と華琳が居るんだ？」

そう、『江東の小覇王』と『覇王』が何故かここに居るのだ。
何故ここに二人が居るのか俺にはまったく分からない。

「面白そうだからよ♪」

流石だな雪蓮……
だがそのうち冥琳がストレスで倒れるぞ？

「私は敵城視察といったところからしら」

今回の件で分かることなんて全く無いと思うぞ、華琳。

「まぁ一刀、何でも良いじゃん」

良くないと思うぞ、劉協。

「何でも良いから真面目な話をして良い？」

「ああ、頼むぞ、詠」

何だか詠の目が飛んでもなく怖いんだが……

「劉備さん、あなたの目指す世界は何ですか？」

月がそう聞くと一気に場の雰囲気が変わった。
月の顔はいつもの優しい顔では無く王の顔だった。
だが、桃香も負けていない。
桃香は顔を引き締めてこう言った。

「私が目指すのは大陸の皆が笑顔で暮らせる世界です」

「それはただの『甘い理想です』え？」

「！？」

俺は驚いてしまった。
まさか桃香がそれを自覚していたとは予想が出来なかったからだ。

「でも、私は誰に何と言われようとその『甘い理想』を貫き通します。
そうでないと私の理想に共感してくれた人達を裏切ることになってしまいますから……」

桃香、成長したな……

「董卓さんに聞きたいことがあります」

「どうぞ」

「あなたの目指す理想は何ですか？」

月は仲間全員を一度見渡す。
そして、全員を見た時そう言った。

「私の理想は私の大切な人達を守ることです」

桃香はそれを聞いて笑顔になった。
月も笑顔で返す。

「何だか似てますね私達」

「そうですね」

全く……現実をたっぷりと見せられて諦めてたつもりだったのにな……

何だか応援したくなってくるな……
『漆黒の死神』が甘くなったものだ……
俺はゆっくりと劉協と劉弁を降ろす。
不満げな顔をしていたが頭を撫でたら許してくれた。
そしてゆっくりと立って玉座の間から出て行こうとする。
それに気付いたのか月が声をかける。

「一刀さん？どこに行くんですか？」

「そろそろ天和達（天和達を助けた後真名を交換した）に会いに行かないとな。

あいつ等を一番最初に見つけたのは俺だから勝手にして良いだろ？」

「あなたは優しいですね」

「言ってろ」

全く……その笑顔は俺を癒すのにいつでも何度も使いやがって……

俺はそんなことを思いながら玉座の間から出て行った。

廊下

そろそろつけられるのは不愉快だから言っておくか……

「おい、貂蝉、いい加減出てこい」

俺がそう言うと先程まで何も無かった所から貂蝉（化け物）が出てきた。

「だぁぁぁぁれが居るだけで動物が気絶するほど気持ち悪ごふぅっ！？」

「うるさい」

途中でうるさくなって殴った俺は間違っていない筈だ。

このままうるさくされたら誰かに見つかっていただろうからな。

「で？何で来たんだ？」

「ちょっと、問題報告と質問事項が出来たから来たのよん♪」
ぐっ、何で原点の俺はこいつの存在に耐えられたんだ？
色んな意味で尊敬するぞ……
「で？まずは質問事項だが？」
「ええ、あなた『覚えて』いるのよねん？」
「いや、『覚えて』いるのでは無く『知って』いるんだ」
俺の言葉の意味が分からなかったのか貂蝉は首を傾げる。
「どうゆうこと？」
「俺が殺し屋をやって五年経ったことだ。
ある日の夢でこの世界の記憶を見た。
だから、最初から『覚えて』いたと言うよりも『知って』いたと言った方が良い」
「成程ねん。納得したわん♪」
こいつ何で真面目な時にはすごく良い奴だと思えるのにな……
「で？問題報告は？」
「ああ、于吉ちゃんと左慈ちゃんを覚えてるかしら？」
「ああ」

忘れる筈が無い……
俺は他の世界の俺とは違い甘くは無いんだ。
「そいつ等がどうした？」
貂蝉は一度言うのを躊躇ったが俺の目を見て言った。
「この世界に来てるのよ」
「何！？」
「それに反董卓連合を起こしたのはあの子達だしもっと悪いことが……」
「何が起こった」
俺は冷静に話しを聞く為に冷静を『装った』
「あなたの『死神四人衆』の三人を操ってこの世界に『否定派』の駒として送ったらしいのよ」
「あいつ等がか……とんだ管理不足だな」
ここまで来ると怒りを通り越して呆れてしまう。
「それに俺の『設定』だが俺が『龍帝』だと？
どれだけ俺をチートにしたかったんだ？」
「正史の人々が認めたからしかたないわん」

「それはしょうがないと思うが左慈達はふざけてると思うぞ？
この前も黒が居なかったら危なかった」

「闇龍の実態の無い身体を創れる能力を使ったのよねん？」

「ああ、あれで白装束の奴等の目を騙した。
しかし……『死神四人衆』の内の三人が俺の敵になるとはな……
すこしきつい……」

「でも、あなたはこの世界を『肯定』し続けるのね？」

「ああ、誰に何と言われようがな」

「そう……なら初代龍帝ちゃんにそのことを言いなさい」

「まさか……」

「ええ、あの子も私達と同類よ。
相談位には乗ってくれる筈よ」

「分かった……今度相談してみる」

「そう……じゃぁ、またねん♪」

「ああ」

俺がそう返事をすると貂蝉は一瞬で消えた。
……初代様も貂蝉達と同類か……

「天和達の所に行くか……」

俺はそう呟いて天和達に会いに行く為に歩き出した。

拠点話　張三姉妹（前書き）

こんにちわ～
今日は一刀と天和達の絡みです。
本編とあまり関係ないので拠点話にしました。
そういえば話しは変わるのですがものすごく今更で申し訳ありませんが
『ｔｉｎａｍｉ』様の方でも作品を投稿しました。
本当に今更です……
投稿作品は
『寂しがり屋の女の子の為に……』
『帰って来た者』
『学園？無双』
『新たな外史を創る者達（別√）』です。
これらを投稿しているためこちらで間が開いていました。
今まで言わずに申し訳ありませんでした……
『ｔｉｎａｍｉ』様の方で投稿している作品も気が向いたらよろしくお願いしたします。
では、始まり～

拠点話　張三姉妹

何故こんなことになったんだ？
俺はただ天和達に会いに来ただけなのに……

「一刀～早くこっち～！」

「早くしなさいよ！」

俺はこいつ等の世話役になった覚えは無いのだが……
何故か俺はこいつ等にに世話役と思われているらしい。

「俺は世話役じゃないんだぞ？」

俺がそう言っても……

「だってちぃ達を助けてここに連れてきたのはあんたでしょ？
責任取りなさいよ！」

と言われてしまう……
はぁ……華琳達に任せておけば良かったかもな……はぁ……

「人和も俺のことをただの世話役と思ってるか？」

「世話役謙護衛」

はぁ……人和までもか……

「一刀～次こっち～！」

俺の人権と言う物はどこに行ったのだろうか？
と、言うかこいつらからましな扱いをいつになったら受けられるのだろうか？
そんなことを思いながら俺は三時間程天和達の買い物に付き合った。

二十五話　闇の死神対漆黒の死神（前篇）（前書き）

こんにちわ～
なんだか最近週刊ユニーク数が減ってるんですよね～
不定期更新だからしょうがないと割り切ってはいるんですが……
コメントも最近無いし……
まぁ、愚痴はここら辺でやめておいて……
では、始まり～

二十五話　闇の死神対漆黒の死神（前篇）

「あいつ等がこっちに……」

本当にめんどうなことになった……

『死神四人衆』はその殺し方や実力、そして四人の通り名から

そう名づけられた。

もし、あいつ等三人が同時にかかって来たら

『あれ』を使っても相当きついな……

「うむ……」

あいつ等が同時に来ないことを祈るしか無いな……

「一刀」

扉の外から詠の声が聞こえる。

一体何の用だ？

「どうした？」

「入るわよ」

「ああ、良いぞ」

その返事を聞いた詠は扉を開けて入って来る。

「何だ？」

「ちょっと、あなたにして欲しいことがあるのよ」

「何だ？」

詠が俺に頼みごととは珍しいな……

厄介事かもしれないが引き受けておくか……

「最近近くの森で怪しげな人影を見るって言う目撃情報があるのよ。

それを調査して欲しいの」

「分かった。

兵士は要らないぞ。俺一人で構わない」

今は最悪なことを考えなければならないからな……

もし、その人影が三人の中の誰かなら一般兵なんて足手まといだから

ら

「白達はどうするの？」

「適当に説明しておけ」

「分かったわ」

詠はそう返事して俺の部屋から出て行った。

俺は龍帝刀を腰の剣を下げる所に下げた。

そして、依頼実行の際に着る服に着替えて準備終了だ。

「さて、行くかな……」

そして、俺は任務の現地へと向かった。

森

「確かここだったな……」

現地に着いて俺は龍帝刀を抜き警戒する。
いつどこからか襲い掛って来られても対応出来るようにする為だ。

「おい！誰か居るのか！
俺は董卓軍の客将をしている者だ！
誰か居るなら出て来てくれ！」

俺がそう叫んでも誰も出てこない。
俺は気を森中に張り巡らせる。
森の中に居る生き物の場所を把握する為だ。
だが、もし気を消しているなら全く効果は無い。

「居ないか……」

本当に居ないのか……
それとも気を消しているのか……
三時間程待っているかな……

三時間後

「来ないか……もう、帰るとするかな」

俺は龍帝刀を鞘にしまい帰る準備をする。
すると、

ガキンッ！

後から奇襲をかけられた。
俺はその攻撃をギリギリ龍帝刀で防いでいた。

「やっぱりお前か……一美」

俺に奇襲をかけたのは俺の妹だった。

二十五話　闇の死神対漆黒の死神（前篇）（後書き）

今回は短いですがここまでです。
次回は一刀ＶＳ一美です。
気付いたかもしれませんが一美は暗殺者です。
一刀は大体の殺し方はマスターしてます。
次回はどんな戦闘シーンにしようか考えています。
では、また次回です。

二十六話　闇の死神対漆黒の死神（後編）

「くっ！」

ガキンッ！

俺は一美と戦いながら開いている場所に移動しようとしている。
こんなに狭い道で一美の攻撃を受けるのは正直きつい。
一美はその場所の状況に応じて攻撃を変える。
暗殺において一美を超える者は居ない。

「正直、一美とは戦いたく無かったんだがなっ！」

ガンッ！

全く容赦しない奴だ。
もう少しで開いている場所の筈だ。
もう少し頑張るか。

「なっ！」

俺が驚いた理由は簡単。
鉄球が飛んで来たからだ。
俺は何とか紙一重でかわす。
鉄球は落ちた場所でそのままになった。

「手元に戻したら居場所バレると判断したか……
良い判断だな」

しかし、鉄球はどこにしまってたんだ？
そこが気になる……
そんなことを考えていると開いている場所に着いた。

「やっとか……
一美！これからが本当の戦いだ！
かかって来い！」

俺がそう言って約十秒後、一美は攻撃を仕掛けてきた。
俺は右腕で龍帝刀を持って一美の攻撃を受ける。
一美はすぐに逃げようとするが俺は左腕で一美の足を持って地面に叩き付ける。
言ってこれで目を覚ましてくれるとありがたいが……
一美はすぐに森の中に逃げた。

「全く、面倒な妹だ……」

本当に昔から世話がかかるからな……
俺は昔のことを思い出しながら一美に語り始める。

「一美、覚えてるか？
お前が殺し屋になった理由……
俺が聞いた時お前はこう言ったんだ。
『お兄ちゃんの負担を少しでも減らしたいから』
本当に嬉しかったよ……こんな俺でも
お前みたいな素晴らしい妹に思ってもらえてるんだから……
一美……お前を置いて来てしまってごめんな……」

俺がそう言い終わった時一美は俺の首に短剣を突きつけていた。

「一美……一緒に居ような」
「うん……おに……い…ちゃん」
一美はそのまま気絶してしまった。
俺は一美を背負ってそのまま城へと歩き始めた。

洛陽の城の玉座の間

「「「一刀（一刀様）（陛下）！」」」
「帰ったぞ」
俺が玉座の間に入った瞬間全員が俺に駆け寄って来た。
「全員、心配をかけたな」
「一っち、何してたんや？
こんな時間まで……」
「ああ、ちょっと色々あってな。
紹介しよう。俺が背負ってるのは俺の妹だ」
俺はそう言って一美を皆に見せる。
「一刀様、このお方気絶してますよ？」
「色々あったんだ」

こいつに襲われて気絶させたなんて言えないからな……

「ふむ……
私達の義理の妹になるのか……」

「だねぇ～」

「一美に何と言えば良いんだ……」

「本当のことを言えば良いじゃない」

こいつ簡単に言いやがった……

「俺はこいつを空いてる部屋に寝かせてくる。
白、空いてる部屋に案内してくれ」

「御意」

一美の部屋

「すぅ……すぅ……」

一美が寝たのを確認して俺は自分の部屋に戻ろうとする。
すると、何か引っ張られた感じがして引っ張られた方を見ると
一美が俺の服の袖を引っ張っていた。

「一美？」

「一緒に寝て……」

寝言で言ってるのは分かっていた。
だが、俺は妹を安心させる為に一緒に寝た。

次の日俺が一美と一緒に寝てるのを見て董卓軍の将全員に誤解を生んだのは
言うまでも無い……俺が何をした……

拠点話　月（前書き）

こんにちわ～
今回は月の拠点話です。
本音としては次回が思いついて無いのでつなぎとして投稿しております。
では、始まり～

拠点話　月

俺は今月と仕事をしている。
俺は補佐だ。何故詠が居ないかと言うと……月曰く『詠ちゃんの苦労を減らしたい』だそうだ。
と言っても月は政務に向いていないらしい……

「へうぅ……」

「どこが分からないんだ？」

俺はそう言いながら月が片づけている書類に目を通す。

「ここです……」

月はそう言いながら書類の一点を指す。
先程からこう言うやり取りの繰り返しだ……
詠が言っていたが他国とかの交友とかは得意らしいが政務は苦手らしい。

「ここはな、こう言うことだからこうして……」

俺は月にも分かりやすい様に教えていく。

「分かりました、ありがとうございます」

「ああ、分からなくなったら呼べ」

「はい」

俺が助手に選ばれた理由は俺がこう言うことが得意そうだからと言っていたが
月はすごいよな……俺は三つの世界の知恵を持ってるからそれなりには出来るからな。
それに北郷家を大きくする為に色々策を講じていた時期もあったからそれなりに知恵は上がった。

「へうぅ……」

「どこが分からないんだ？」

「ここです……」

月の指さしたところはそれなりに難しい所だが俺としては大したことでは無い。
俺は分かりやすく教えていく。

「ここは、こうで……」

そんなやり取りがしばらく続き……

「終わりました！一刀さんありがとうございます」

「いや、俺はこれで失礼するぞ」

「あ、あの！」

「ん？」

月は俺の服の袖を掴んでいる。
何か俺に相談したいことがあるのか？

「一刀さん、忘れたんですか？
約束……」

「約束？……あ」

そう言えば月が手伝う代わりに何か一つ言うことを聞くとか言ってたな。
すっかり忘れていた。
今、考えても何も出ないぞ……

「……しばらく考えるから待っててくれ」

「ふふっ、構いませんよ？
今日はありがとうございました」

「ああ、ではまたな」

俺はそう言いながら月の部屋から出て自分の部屋に戻っていった。

拠点話　月（後書き）

短いですが拠点話だということで勘弁してください。
さて、明日は……恐らく三作品更新します。
一作品目は『盾としての運命を背負った御遣い』
二作品目はｔｉｎａｍｉの『帰って来た者』
そして、三作品目は……こちらの……お楽しみに。
では、また次回。

二十七話　復讐の炎（前書き）

こんにちわ～
今回はとっても短いです。
まぁ、フラグ立ての話しだからしょうがないです。
では、始まり～

二十七話　復讐の炎

「北郷一刀……！」

そう暗い部屋の中で呟いたのは性は『袁』名を『紹』字を『本初』。
反董卓連合軍を結成させた張本人である。
彼女は南皮を治める任を董卓から渡されていた。
だが、誇り高い彼女が誰かに従っているのに我慢できる筈が無い。
今彼女はこうなった原因を創った北郷一刀を恨んでいる。

「あの男は必ず……！」

だが、袁紹は分かっていた。
相手は龍帝。敵う筈も無い……
そう考えていた時……

「復讐の手伝いをしてやろうか？」

いきなり袁紹の後には二人の少年が居た。

「！誰ですの！」

袁紹は腰にある剣に手をかける。

「俺は左慈。北郷一刀を恨んでいる者だ」

「あなたも……」

「ああ、だからあんたの復讐の手伝いをしてやる。

こいつは北郷一刀と同等の実力を持っているし
こちらも龍を一体手に入れた。
後は仕掛けるだけだ」

「分かりましたわ！
今すぐ私の家臣にそれを知らせますわ！」

「ああ、行ってこい」

「それよりその人は何と言う名前なんですの？」

「ああ、こいつはな

及川だ」

二十七話　復讐の炎（後書き）

短くてごめんなさい……
それはさておき！
次回！一刀ＶＳ及川！
では、また次回です。

二十八話　袁紹との戦い（軍議篇）（前書き）

こんにちわ～
すいませんが予定変更です。
一刀ＶＳ及川のシーンはもう少し後にします。
では、始まり～

二十八話　袁紹との戦い（軍議篇）

「反逆の可能性だと？」

軍議で詠の口から上がったのは袁紹が反逆を企てていると言うものだった。

「ええ、袁紹が兵を集めているのよ」

「……」

その言葉に俺は少し考える。

確かに兵数ならば奴等の方が多いかもしれない。

だが……

「袁紹め！董卓様に剣を向けるとは……！許しておけぬ！」

「華雄！今は軍議中や！それに一っちもも何か考えとるやろうが！邪魔すんなや！」

「む、すまん……」

霞すごいな……まさか華雄を黙らせるとは……

「で？一刀何を考えているの？」

詠がそう言うと皆の視線が一気に俺に集まる。

俺は言葉を選びつつこう答えた。

「俺と龍と言う戦力がありながら奴等は何故反逆なんてするんだ？
俺と龍の戦力は半端じゃない。反逆なんて企てても返り討ちにあうだけだろ？」

そう、俺と龍の戦力を合わせると百万の兵さえも簡単に倒せるらしい。（詠がそう言っていた）

「そこなのよ……あんた達の力はそうとうなもの。
それでも反逆を企てると言うなら仮説が出来る」

「俺と龍に匹敵する実力を持った奴が現れた……」

「ええ、そこでそいつ等の相手はあんた達に任せて他の将は恋達で何とかするわ」

詠がそう言うと月が玉座から立つ。
詠の言うことに反対するような目をしている。

「分かった。
そいつ等は何とかする」

「一刀さん！？」

月は驚いた顔をして俺を見ている。
恐らく俺に危険な真似をして欲しく無いんだろう。
月はそういう子だ。

「良いんだよ。適材適所と言う奴だ。
それより一美出て来い」

「は～い♪」

俺が一美を呼ぶと玉座の間の柱から出てきた。
多分居ると思って呼んだんだが本当に出てくるくるとは思わなかったぜ……
俺は一美に耳打ちをする。

「了解♪任せてね」

「ああ、頼む」

そう言うと一美は玉座の間から消えて行った。

「さて、詠。
軍議はここまでで良いだろう？」

「ええ、それでは解散！」

詠がそう言うと皆が各々解散して行く。
すると月と詠が俺に近づいてくる。

「一刀さん、一美さんに何を頼んだんですか？」

「結構気になるのだけと……」

「すまん、今は言えないんだ。
だが、絶対にお前等に害を為すようなことじゃない。
約束する」

「……分かりました」

「月がそう言うならボクに異論は無いわ」

そう言って二人は立ち去った。

「さて……左慈、于吉。

今回はお前等の隙にさせないからな」

俺はそう呟いてその場から立ち去った。

二十九話　袁紹との戦い（戦篇前篇）

俺達は袁紹が攻め込んできたとの知らせを聞いて戦の準備をしている。
無論桃香達の軍勢も共に居る。
戻って来た一美曰く袁紹の戦力はどこから集めたのか知らないが十八万。
戦力的にはこちらの方が多いが袁紹には俺が思っていた通り龍が居たらしい。
それと『死神四人衆』の内誰かが袁将軍に居るかどうか調べさせたが分からなかったらしい。
それに……

「袁将軍も腐ったもんやねぇ……八万も民から徴兵するなんて……」

そう、霞が呟いた通り袁紹は俺達に勝ちたいが為に徴兵をしたのだ。
しかも徴兵したのは十歳から六十歳と言う広い範囲で。
最早袁紹は太守失格だろう。
だが……

「その原因を作ったのは俺か……」

彼女が誇り高いと言うことは知っていた。
それなのに俺が彼女の誇りを踏み躙ったことにより彼女の蝋燭に復讐の炎を付けてしまった。
それが今回の結果を生み出してしまった。

「後悔しても既に遅いか……」

そう、既に遅い。
だからこそ……

「俺が彼女を止めるべきだ」

俺はそう呟き覚悟を決めた。
彼女を止めることができるのは俺だ。
彼女は絶対に殺さない。
俺は彼女を止めるだけだ。

そしてしばらく経ち袁紹の軍が俺達の前に現れ攻めようとするところまで来ていた。
月は口上の為に兵達の前に居た。
そして、月は少し深呼吸をしてこう言った。

「今、袁紹は我等の前に居る！
我の土地を奪う為に！
我等の家族の命を奪う為に！
我等はそれを許してはならない！
我等は守るために戦わなくてはならない！
それが例え敵の命を奪うことになろうとも！
全軍突撃！」

『うおぉぉぉぉっ！』

月の言っていることには正しい。
だが、気のせいなのか月が口上を終えた瞬間彼女の顔がゆがんだように見えた……
いや、絶対に気のせいではないな……
俺は彼女の本質を知っているから分かる……

早くこの乱世を治めなければ……
そう思いながら俺は戦場を駆けて行った。

「ぐぁっ！」

「がぁっ！」

俺は一人づつ全力で斬り捨てていく。
その中には庶民が居ただろう。
俺は庶民を斬ったという自責の念で潰されるだろう。
それでも俺は……

「守りたい者を守るのみだ」

そう呟いた瞬間俺の前に物体が現れる。
それを弓だと認識瞬間何とか体を捩ってその矢をかわす。

「流石『かずぴー』やな」

その声は口調こそふざけてはいるが弓矢に関しては俺が知っている
弓使いの中で最も強い
奴を闇の世界の人間はこう呼ぶ
『夜弓の死神』
と。
奴が人を殺すのは絶対に夜。
そして、奴に殺された人間には確実に脳天に穴が開く。

「まさか、本当にお前が来るとはな……
本当に面倒だ……なぁ？及川？」

「そうやなぁ……でもな？
わいも戦わないといけないねん」
「お前程の奴が操られるなんてな」
「強い人間は弱いって言うことや」
「言葉遊びをしている余裕はないみたいだな」
空を見ると一体の龍が白達と戦っていた。
白達は苦戦している。
「行くぞ、及川。
早く片付けてあいつ等を援護しなければ」
「ええで。わいも早く終わらせたいからの」
俺達はお互いに武器を構えた。
そして……死神同士の戦いが始まった。

三十話　袁紹との戦い（戦篇中編）

「ふっ！」

及川が放った矢が十本同時に飛んでくる。
その内何本かは気で創った矢。
気を纏った得物でなければ消せない。

「はぁっ！」

俺は龍帝刀に気を纏わせ気で創った矢と普通の矢を斬り落とす。
その行為で一瞬の隙が出来てしまう。
そして、またもや十本同時に飛んできた。
俺はそれを右に飛んでかわす。
そして、右手に気を溜めて一気に放つ。

「『龍波』」

何となく出来るかもしれないと思ってやってみたら出来た。
だが、龍波は一直線上に気で出来た龍を放つ攻撃だ。
いくら早かろうが直線的な攻撃は絶対に当たらない。
そう思ったが……

「ぐっ！」

「！？」

及川はかわさずにその攻撃を受けた。
気で衝撃は減らした様だが……らしくない。

初見の攻撃は絶対にかわすべきだ。
どんなことになるか分からないからだ。
それなのに及川は受けた。
何故だ？
何か理由が？

「いたた……痛いわ～
行くで！かずぴ～！」

そう言って及川はまたもや十本同時に矢を放つ。
俺は左に飛んでかわしながら考えごとをし始める。
どうしてだ？何で及川は奥儀を使わない？
あれならば俺が『あれ』を使わない限り俺に傷を負わせることくらい出来る筈だ。
なのに何故奥儀を使わない？
……試してみるか……

「『龍波』」

気で出来た龍が及川に向かって飛んでいく。
及川はそれを……

「ぐっ！」

かわさなかった。
やはり……
及川は奥儀を『使わなかった』んじゃない『使えなかった』んだ。

「及川、お前及川じゃないだろ？」

「何言うとるんや？」

「ああ、正確には『俺と戦っている』のは及川ではないだろう？」

「今、わいはかずぴ～と戦ってるやないかい」

「俺はな『自分で戦わず誰かを操って戦わせる』奴を戦っている奴とは認めないんだよ」

俺がそう言うと及川は一瞬驚いた顔をしたがすぐに笑みを浮かべる。

「いつから気付きましたか？」

声こそは及川の声だがこの口調は聞いた忘れたことが無い。

「于吉……！」

最初の世界で否定派として俺達の前に立った敵。

「ふふふっ、なかなか良い出演では無いですか？
戦場で見た敵はかつての自分の親友。
殺しますか？あなた達の掟に従って」

「ふんっ、馬鹿が……
お前が思っているほど俺達の絆は強いんだよ」

「救うんですか？無理ですよ」

「それはやってみなければ分からないことだ！」

俺はそう言って刀を鞘にしまい及川に憑依している于吉に向かって走る。
それを見た于吉は矢を構える。
「蜂の巣になりなさい！」
その言葉と同時に十本の矢が飛んでくる。
だが……その程度だ。
「気功術！『龍神化』！」
「なっ！？」
于吉が驚いたのも当然だろう。
一瞬で俺が消えたように見えた筈だからな。
実際は早く動いただけだ。
銃弾よりも早い速さでな。
そして于吉が俺を見たのは……目の前でだろう。
「っ！」
「遅い！」
俺は左手で左手を掴み拳を振りかぶる。
「目を覚ませ！おいかわぁぁぁぁぁぁっ！」
そして、俺の拳は及川の顔面を捕らえた。
そして、及川は吹き飛んだ。

「はぁ……はぁ……『龍神化解除』」

一気に体が重くなる。

「誰か！」

「はっ！」

「あいつを捕えろ」

「はっ！」

その兵士は及川を抱えて及川を本陣に連れて帰った。

「後は……あの龍だな……」

俺は白達と戦っている龍に向かって走った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5279v/

新たな外史を創る者達

2011年10月28日17時01分発行